

信ちゃんの昔話 第一部

カフェと移民

沼田信一 著



表紙説明…

コント札一尺祝い花珈琲…高橋果亭

（文庫編集部注・1コント札は一万円札のような感覚）

信ちゃんの昔話（第一部）

カフェーと移民

沼田信一 著

お笑いと涙の開拓実話

牛窪 囊

公私に多忙な沼田信一さんが
「いるかね。」

と、忙しそうに家に入ってきた。

「これ書いてみたが、どんなもんかね？」
原稿の束を見せて微笑した。

私はペラペラと部厚い原稿の束をめくって読んで見た。

「これはいい、沼田さん。実話だから実感が共って魅きつけられるよ。皆んな漫画になる。僕が描くから挿絵に使ったらどう。」

「おお、描いてくれるかね。体は大丈夫かい？」

「ゆっくりでよかったらね。面白いので描きたくなっただよ。」

「じゃ頼む。」

話は決まった。私は早速読み始めた。読み始めたら、面白さについて一気に読破してしまった。

実話がそのまま、見たまま、在りのまま、聞いたまま、感じたまま、飾らず素直に淡々と書かれているのが、実感を呼んで魅きつけるので、著者の緻密、正直な性格が文に生きている。沼田さんでなくては書けない貴重な開拓実話である。

△

△

△

その昔、六、七十年前、望郷の念に泣きながら、悲願錦衣帰国を心の支えに、言葉の通じない不自由な悲惨な生活に耐えぬいてきた苦闘の物語、失敗あり、涙あり、お笑いあり、楽しみありの先人の汗が肌に伝わってくる「開拓実話」である。

移民の実態を伝える「実話開拓裏面史」としてお勧めしたい。

面白かった。―珍しかった。続編を待っている。

ブラジル・モラロジー研究協会

理事長 森 昇

此の度、親友の沼田氏が移住した当時の思い出集を出版されると聞いて少なからず驚いている者であります。

私と沼田氏との出合いは、既に三十年も前からのもので、氏は近く八十才になろうとする高令であります。その高令でありながら、私共の組織するブラジル・モラロジー研究協会の副理事長を長年に亘って勤める傍、現役の社会教育講師として各地の講演に奔走して居ります。

尚、私共の協会では一週間の泊まり込みの道德講座を十五年前に開講してから、近く百回目を迎えようとして居りますが、氏は初めから休みなく出講を続けられて居ります。

その大変な犠牲の中で、数年前からロンドリーナにゴルフ場の無い事に気付き率先して弟さんと協力してその造成に努力されているのです。白分ではゴルフのクラブを握った事も見た事もなかったと言われながら仲々立派な物が完成に向かっています。

そうした忙しい中で、いつの間に思い出集が執筆されたのか唯々驚くばかりです。

本文を読ませて頂くと唯の昔話というだけではなく、仲々面白く又、氏の物の考え方に教えられる事が種々と

あります。

出来ることならば、続編をお願いしたい気持ちにかられています。

信ちゃんの 昔 話 第一部『カフェーと移民』の

発刊を祝して

パラナ州日伯文化連合会名誉会長

福 島 正 登

今日の日系コロニアの発展はめざましく、伯国社会の二世三世が各方面に活躍する多くの人材を擁しております。しかし、そのかげには開拓移民の苦労と努力と開拓精神があつたからこそ、今日の日系社会があるのではないかと思います。青雲の志なかばにして今日の発展を見ず、たおれた人もあまたある事と思えます。

本年は日系移民八十八年を迎えその年に生まれた二世は、今年米寿の祝いを迎えておられます。この良き年に沼田信一氏が開拓当時の思い出の書を発刊されると聞き、時を得た事と感動しました。今の時代に二世三世に移民の苦労を話しても時代おくれだと思わないかもしれません。しかし、書を以って後世に残してこそ、此々数十年後の四世五世が移民の尊さを感じるときがあると確信するものであります。

沼田信一氏が移民の開拓当時の思い出を発刊される事に敬意を表し、沼田氏の益々の発展と御健勝を祈念致しまして発刊のお祝いの言葉と致します。

発刊に際して

昨年の末頃、パラナ新聞の編集長古田格三郎氏より、「新年号に何か移民初期の思い出を書いて欲しい。」との話があり乍ら、何さま書かねばならぬ手紙一本書くにもままならない私ではどうにもならないと思い乍ら、それでも折角だからと考えていると、先ず思い出したのは、K氏が狐にだまされたと言つて顔色を変えて早朝訪ねて来た一件であつた。

勿論それは酒に酩酊しての錯覚ではあるが本人は真剣に感じた事であり、結婚式に招かれての洋服が、泥まみれで滅茶苦茶の恰好で「沼田さんあなたの畠に狐が居てだまされた。」とぶるぶるとふるえ乍ら話された姿が、今でも有りありと眼に浮ぶのでその一編を書いてみると、次から次と色々の事が思い出されて、不出来乍ら三十編が三ヶ月余りの間に書き上つたので、マンガ誌その他で知名の牛窪氏に話をする、「一冊の本にまとめて置いたら。」とすすめられて「カフェーと移民」と題して纏める事にしたので、いささかの羞恥と、多少の喜びを感じて

いる次第。

終りに此のきっかけを与えて下さった古田格三郎氏並びに、一冊の本に纏めて置く事をすすめ、尚挿絵マンガを画いて下さった牛窪清四郎氏に深く感謝する次第です。

目 次

お笑いと涙の開拓実話・……牛窪襄

続続を待っている。森 昇

信ちゃんの昔話・第一部『カフェーと移民』の発刊を祝して 福島正登
発刊に際して

第一話	カフェーと移民	9
第二話	移民二十五周年祭	14
第三話	ファゼンダ・コアチー	18
第四話	宰川氏のピッカード開け	23
第五話	娘さんの仕事で驚く	26
第六話	山豚一匹五ミルレース	29
第七話	狐にだまされた話	32
第八話	曾我部氏の大木倒し	36
第九話	ピンタードのお頭付	39

第十話	副校長の南米移住	4	2
第十一話	美しい花が咲くか	4	5
第十二話	火の玉	4	7
第十三話	肺に穴があいていた	5	1
第十四話	コアチーの知恵	5	4
第十五話	猿にも信仰はあるか	5	7
第十六話	中央区共有地競売さる	6	0
第十七話	百k m余の徒歩ムダンサ	6	3
第十八話	塩辛と梅干し	6	6
第十九話	弁論大会	7	0
第二十話	ラッサにかかった上田一郎	7	3
第二十一話	サルの子け捕り	7	6
第二十二話	木の洞に発砲	7	9
第二十三話	ペスカの練習	8	2
第二十四話	蒔かぬ西瓜が生えた	8	6
第二十五話	牛が石けんを喰う	9	0
第二十六話	他宗の神棚を拝ます	9	4
第二十七話	九十六キロを歩く	9	7
第二十八話	井戸掘り	1	0
第二十九話	ラポーザの料理	1	0
第三十話	泥棒に負けた裁判	1	0
あとがき		1	1

装偵と漫画・・・牛窪襄

表紙説明：コント札一尺祝い花珈琲：高橋果亭

第一話

カフェーと移民

鈴木南樹氏の書かれた一節にかさと丸サントス入港の情景を、『金の成る木のコーヒー園を眼前にして、八百の移民たちが、皆興奮のるつぼの中に陶醉しているのであった。』とある様に、初期の移民の夢は、その大方がカフェー栽培ではなかったかと思う。

私達の親達も、永年作物のカフェーを一度植えると五十年も六十年も生産してくれる上に世界的に需要度が高く従って値段も良い、との宣伝に希望を抱いて渡伯して来たのであった。

一般のコーヒー園への労働者として渡航して来た人たちも、中には日当にもならず苦勞された人も相当いたらしいが、希望は金の成る木のコーヒー園で働く事に夢を持って来られた事には違いないと思うのである。

ところが私達の場合海外興業株式会社、通称海興の経営するセッテ・バーラス植民地に土地を買って渡伯して来たのであるが、此の植民地にはコーヒー園なるものではなく、一部にお茶を植えている家族は有ったが、その殆どは米作りであった。

セッテ・バーラスに到着して二、三日視察し、夜は海興の事務所に集まって、今後の生産物等の説明を聞いたが、

米作、お茶に添えてバナナを栽培して乾燥して出荷する事も普及されてくるであろうと言う事でカフエー栽培の話は出なかったのであった。

その上、着伯が七月二十九日の上陸でセツテ・バーラスに到着したのは八月に入ったので急いで伐採をして遅くとも十月には蒔付をしなければ一年を無駄にする事になると言う事で、兎に角来てしまった以上当分は此所に落ち着くより仕方なしと決心した。

そこで事務所の壁の植民地の地図の上で空いている土地の説明を聞いている内に、地図の上方の植民地外の処に一本の線が画かれている事に気付き、「何のための線か」と、質問すると、「これは将来鉄道の着く予定線で今の奥地程、駅に近く便利になるのです。」との説明に、父が良しそれでは、一番奥に決めたと言うと次が大西氏、その手前が加藤氏と決まった。此の三家族は北海道より知り合つて来たのであった。

次の地区を同じ北海道の出身である宮崎氏並んで遠国氏が決めて入植する事になり、早速ムダンサ（引つ越し）を二十四km奥のマンパウロ（地名）収容所に運んで原始林の開拓に取り掛かるのであるが、小屋の一軒も無いジャングルであるから大変である。

それでも急いでデルバ・マツト（山きり）に取りかかった。デルバーダ（伐採した場所）を焼く前に、旧移民が遊びに来ての話の中で、此処の植民地では駄目だ、幾らかの資金の有る内に良い処へ移転しなければ大変な事になる

とまず私の父が気が付いたのであった。

旧移民の話とは、その人は農家ではなく、カマラーダを集めては請負仕事をして歩いていたが、丁度その人が来られた時に、私たちは山焼きまでに自分のロッテ（区分け）に家を建てようと考えて、パルミット（椰子の一種）の丸太を集めて、割っていた。弟妹たちは、割った物の中の芯の柔らかい部分や、外側のコケを斧や鎌で削り落していた。海岸山脈の木には雨量が多く暖かいからかコケが沢山生えていて、気になったからの事であった。

ところが、その人の言うに、「此処の百姓は土地があれば、一年作った畠は、そのまま荒らして置いて、二年目は新しくマット（森）を、デルーバした方が草取りが楽なので得をする、あなた方は十アルケール（1アルケール＝約二町歩四反）も有るのだから、四、五年は大丈夫、四、五年すれば初めのデルバーダは又マットの様になっていくから（再生林）、それを切って焼き払えば簡単に作れる。」と、言う事で、その為には、その度に作る畠の中央に小屋を建てた方が得策である。従って一ケ年しか住まない家にその様な手間をかける事は損だ、という事であった。

此の話を聞いて父は驚いたのであった。ブラジルへ、永年作物を作りに来たのに、開拓した土地が一年しか作れないとは大変だ、そんな事では体力が持たない、資金の幾らか有る内に、カフェーの育つ地方へ移らなければなら

ないと気付いたので、まず大西、加藤両氏と三人寄つては、相談を始めた。

三人が持ち寄るブラジル紹介のパンフレットには、どれもこれもコーヒー園の、写真入りの宣伝である。ノロエステ、パウリスタ線の宣伝が多い。中にはパラナの宣伝も有ったが、何所が良いのか来伯早々では見当がつかない。誰かに尋ねるより仕方が無いが、尋ねるとしても近所の人では駄目だ。此の植民地の人達はブラジル全国から此所が良いと思つて来ているので訊ねても無駄だ、では誰が良いかとなつた時、父が出した意見が的中して、翌年北パラナの国際植民地へと移動して来たのであるが、此の植民地は、それより三十余年間は行けども行けどもカフエーカフエー又カフエーと歌人達はパラナはカフエーの樹海と詠み上げる迄にカフエーが植付けられたのであつた。

かくて、カフエーを夢見て来た移民の私達の希望は一応叶えられたのであつた。

然し又、世の中であるから、大半の者が良かったとしても、何時も一部には、健康問題、経済問題、人間関係等々で人知れず涙を流して居る者のある事は自然である。

私はこうしたカフエーを夢見て行軍した日本移民の一人としてその六拾余年（十五歳で渡伯、現七十七歳）の生活の中で見聞した事を、纏めてはとても書けないので短文で書いていると、三ヶ月余りで三十編に達したので、

せめて初めの三十編でも原稿散逸を防ぐ為にもと思い、「カフエーと移民」と題して印刷にしてみる事にしたもので、誰か目を通して下さる人が居てくだされば幸いです。

今までは誰かが書いて下さるかと思っていたものを、私が書くことになって驚いている次第である。此れを一つの機会として各地方に実在したいわば移民の裏話を纏めて下さる人が居ればと願って止まない次第である。

第二話 移民二十五周年



先人がロンドリーナに於いて、移民の日を意識したのは案外に早かったのに驚く。ここでロンドリーナと言う事は、国際植民地と言う事で、まだカンベに二、三軒の家があっただけで、ローランジャから奥はマツトとして眠っていたという時代の一九三三年に北パラナ土地会社の日本人部総代理人をして居られた氏原彦馬氏が気がつくのであった。

一九三二年末では、今のルビアセア区から、中央区、ファゼンダ・コアツチー（コアツチー耕地）の契約者から、遠くロレーナ、バーラ・グランデ迄を加えた国際植民地全域でも三十七家族の入植者であつたという。ロンドリーナの町にさえ七家族との全くの草創期の事であつた。翌三十三年四月十一日に各地有志が連絡機関の必要を感じて総集会を開いたとの記録がある。会場は氏原氏のサーラ（応接間）であつたと言うから、十二、三名の人が集まつたかと想像する。

驚くべき事は、その日の決議が余りにも飛躍している事である。唯、日本人会を結成する位でなく、実に日本人会館の建設迄が決議され、六月十八日の移民の日に盛大な落成式を兼ねて移民二十五周年祭が行われているのであるから私は驚いたのである。

開拓当時のフェジョン（豆）を収穫したがサッコ（俵）で買ってくれる人が居なかつたので、戸別に三キロ、五キロと売って歩いたとか、アロース（粳）も精米所がなく、原氏の水車でついてもらつていたという時代の苦しい生活がいられている時、どうしてその資金が集められたのであろうかと調べてみると、敷地は氏原氏が三八〇ミルレースで購入して提供されている。

木の株をおこしたり、地均しは青年が何人か出て奉仕をしたというが、町に七、八家族程の日本人であつたといふのであるから、一区、中央区、ファゼンダ・コアチー、二区の田端氏あたりまで奉仕されたものか、徒歩で道具

弁当持参で大変な事であつたろうと思う。製材は、土地会社の許可をもらつて、まだ売り出していないロッテ（地区）の木を植民者がデルーバ（切倒し）して適當の長さのトーラ（原木）に切つた。これも奉仕、セラリヤ（製材所）はカンベ、当時ノーバダンシンと言つていたがそこに一軒のセラリヤがあつたというが、私は町になかつたと思う。カンベから四、五キロ行つた所のリツカーサのファゼンダ（耕地）にあつたのではないかと考える。とにかくカンベに持つて行つて製材にしてもらうのであるが、事情を話すと感激して実費という安い事にしてくれ、カレット（運賃）もガソリン代で運んでもらい、大工は誰であつたのか、私は既に來られていた座光寺氏であつたかとこれも想像する。瓦はファゼンダ・フレーザから頂いたそうだ。かくして、相談から六十六日目に落成式を迎えたのであるから全くの驚きである。

責任者は「寢食を忘れて」、と言う言葉の通りの奔走であつたと思う。

尚、落成式の六日後再び集会を開き、此の会館で日本語の学校を開く事を決議して、更に一週間後の七月一日には開校したとの事である。

内山総領事も感激して激励の祝辞を送つて來られたのであつた。尚、開校式後運動会が催されたといわれる。町に十家族も居らなかつたと思われる時代に誰が世話をされたのか、又カンポ（競技場）はルア（街路）ででもされたのか、ともあれ国際植民地最初の運動会であつた。

この子弟教育に熱心であつた先人の苦勞を偲べば、今移民九十周年に向かつて元氣で活躍出来ている人達は、何を社会に贈つて先人への恩に報い、又将来の人に喜ばれるか、ボツボツ計画してもらいたい。私も老齡にはなつたが、一隅の協力はしたいものと考えている次第である。先人は二ヶ月でトーラのデルーバから始めて会館を落成したが、現代の建造物はそう簡単には出来ない。一、三年前から検討に入るも、早すぎるという事はないと思うのである。

（文庫編集部注・このシリーズの主な舞台、海岸に近いセツチ・バーラスについては「ブラジルに於ける邦人発展史」（下巻）の第一章に詳しい。内陸部のパラナ州のロンドリーナ近辺については（上巻）の392ページに記述あり）

第三話

ファゼンダ・コアチー



(今日は日曜だよ)

ファゼンダ・コアチーは北パラナ土地会社が一九三〇年に開拓して六万本のカフェーを試験的に植付けられ、全員外国人の労働者が働いていたのであったが、唯の労働者であつたらしい。

翌三十一年に荒長十郎氏一家が移転して来て、後の中央区になる処に二十アルケーレスを購入されたが、直接

原始林に入植するより一時前年に開かれたファゼンダに入って後ボツボツと開拓にかかる事として、コアチー耕地に三年の契約を結んだのであった。十月八日の事であった。

それより一週間おくれて、十四日に原国次郎、風早慶昧、早坂幸太郎氏らの三家族が到着し直ちに一区への入植を果たしているそうで、此の四氏が、国際植民地の草分けとなる人であろう。

ファゼンダ・コアチーには荒氏に続いて、翌年一九三二年の七月に上路保一郎氏、九月に今川嘉寿郎氏が入り、十月には緒方万吉氏がロンドリーナのボテコ（小店）をフェツシャして（閉めて）契約され、引き続いて、天野斉、松原松太郎、西谷峯造、竹田弘、林某氏らが続々と契約されたらしいが、此の様子から見ると初年度に契約者が居らず、翌年も十月となってボランテ（臨時雇人）は大変と会社の方で好条件を出して誘ったのではないかと、私の想像である。

条件は三年間契約（既に一ケ年過ぎていたのでカフェー植付けより四ケ年である）で、実るカフェーはもらい更に三年間の手入賃として一千株に対して五百ミルレースを貰ったという事であるが、事実はこの五百ミルは購入する地代の入金に廻してもらって、それぞれが契約中に地主となれたのであった、と、言う話である。上路、竹田氏は一区に、林氏はカフェザール区に、残りの人は皆中央区で地主となったのであった。

私の父は三十四年にコアチーの天野氏のパイオーラ（物置小屋）を借り、後に松原氏のパイオーラに移ったかと思われるが記憶はあいまい。然しその頃のコアチー耕地は殆どが日本人で外人は二、三家族であつた。

又、その筈である。十家族余りの日本人の大体の家族構成から見て、五万本の経営は楽である筈なのにファゼンダには六万本しか無かつたのであるから。日本人の耕地の感がするのは当然であつた。

私の父も荒山だけでは野菜一株植えるにも不自由するからと、松原氏の受持ち分から千二百株を一ケ年又借りして、作らせてもらったものである。

コロニアも私が奥にいたから奥から数えると、西谷、松原、天野、荒、林氏、次に外人が一、二軒いて上路氏ではなかつたかと思う。今川氏は既に他人に譲つて中央区に移つていた様であり、緒方氏も既に中央区に移つていた。荒氏の三男、四男の十歳位の男の子が上手に馬車を仕立ててはシツチへ通つていた姿を思い出す。冬の早朝、うす暗い内に起きだして、家の前に火をおこして立ち話をしていた荒氏兄弟の姿も懐かしい。

いずれにしてもファゼンダ・コアツチーは日本人の足掛かりとして大變に役立ったファゼンダであつた。

今は、ジャルジン・シャングリ・ラとなつて發展しているが、私たちには懐かしい思い出のファゼンダである。私の家では、松原氏の持ち分のカフェー六本巾で下からカビセーロ、今のアベニーダ・チラデントス迄二百余本

の細長い畠を一年間作らせて貰う事になり、一寸した野菜や小豆など植え、高い方にはアロース（米）を植えた。ファゼンダでは、日本人も外人も鶏を放し飼いするので一タイオン（一区切り）、カフエー五十株分位までのフェジンは生えた若い芽を食べられて殆ど全滅で、随分ひどいものだと思ひ何故皆さんは此処にフェジョンを植えるのだろうと聞くと、植えなければまだ上迄行くだろうから鶏の餌に植えるのだと言われた。そういう考え方も有るものかと聞いていたが、私の家では小豆を植えたら、小豆の芽は味が違うのか食べられず良く出来て、十五俵程のきれいなブラジル小豆がとれたが結局は買手も無く、それ程食べられもせず、その内に捨ててしまったのであった。

いつもショップピング、コントロールの前を通る時、このあたりをカフエー六本の巾で下のBR迄の細長い畠をカルピ（草取り）をした事を思ひ出すのである。母が麦藁帽子をかぶって一緒にカルピをしていたら、通りかかりの外人に、「今日は日曜じゃあないか」とひやかされた事があつたが、此処の畠の仕事は日曜の仕事になつていたのかも知れない。とに角入植初年度は、日曜だからと一日ゆっくり休むような事は出来なかつた。

（註1） ファゼンダ・コアチーが支払つた三ヶ年の手入賃が、一千株に対して五百ミルレースであつたという事は四千株を契約すれば、五アルケールの土地が払えたの

であるから全くの好条件であつた。

尚、契約した諸氏が契約中に自分の土地を開拓していた事を思うと、日本人の働き振りに安心した会社側は、契約中に土地を、手間賃の前渡し形式で買わせてくれた様である。

私たちの来た三十四年には契約中に関わらず西谷、松原、天野氏らは既に自分の土地を開拓にかかっていたのであつた。

(註2) 緒方氏はロンドリーナでボテコ(小店)をされていたのであつたが、その建物はパルミット(椰子)の小屋であつたと言われるからおして知るべしで、ファゼンダ・コアチーの契約条件を知ると、地主になるもつとももの近道と飛びついていかれたのは賢明ないき方であつた。中央区は今川氏の隣りに五アルケールの地主となつて居られた。コアチーに契約して働く事一年ほどで土地を貰つて入植していた。ファゼンダの仕事は他人に譲つていたのであろう。小さな子供の多い夫婦であつたが案外チャツカリ屋であつたのかも知れない。開戦直前十八セントスで土地を売つて帰国し、終戦後再移住して来ていたそうであるが、私は再び会う事はなかった。

第四話

宰川氏のピッカード開け

フレーザ植民地は、ファゼンダ・フレーザの耕主が自分の耕地の半分余りを開拓資金作りに売り出されたもので、北パラナ土地会社の分譲地ではなかった。

フレーザ氏は夫婦共に英国人で立派な人であったが、主人は気の毒にも四十歳前後で突然亡くなられてしまった。胃腸が悪かったという事である。

このフレーザ氏が売り出されたファゼンダ寄りのロッテ(区画)の始まり十アルケールがアーグアロンリッタの水源地で、次が五アルケールのロッテで、辻本某氏が三アルケールに宰川喜太郎と言う元軍人が二アルケール買うことにしたのであった。フレーザ氏は五アルケールにピッカード(境界)を測量して済んでいるので、改めて二つに分割するには測量費を別に払って欲しい、と言って図面を持って来られたそうである。経費は技師とカマラーダをわざわざ連れてくるのでこれこれ掛かるとの事であったらしい。

此の時宰川氏が、ロッテは狭い上に両側は既にピッカードが入っているので簡単に測れると思って自分で引受けてピッカードを入れたのであるが、マットの中に入るピッカードは曲者で簡単には行かないものである。このロッテはミーナ(湧き水)に近い為にカベセーロ

（上の方）は大変広く、下のコルゴ（川辺り）では十四、五メートルのようであつた。

どうにかピッカーダを入れて隣の辻本氏も承知して事は無事に済んだかに見えたが、後日問題が持ち上がったのであつた。

私とその問題に行きあつたのは開拓二年目頃であつた。カフエーがコーバ（カフエを植えた穴）から上に出て四、五段枝を出していた。青年会の用事で徒歩で宰川氏を尋ね、その用事の後で宰川家を辞してカリヤドール（作道）を上抜けて町へ行くべく歩き始めると、あけてあるカリヤドールに、どうした事かわざわざ木の枝やパルミットなどジャマ物を出して車の通れないようにしてあるのであつた。

後日近所の人に聞いて見るとデビーザの事でもめているとの事であつた。宰川氏の入れたピッカーダに合わせて共同で道をあけて、それに合わせてカフエーも植えたのであるが、木の枝も腐つてきて見通しが利くようになると、カリアドールが途中で曲がつて宰川氏の方へ食い込んでいたのであつた。

宰川氏にすれば、自分が測るのだから隣に食い込んではないと気を配つての事であつたろうが、なにしろ狭いロッテ（土地）であるから後日見通しがつくようになつてから二、三メートルも食い込んである事がはっきり見えるのであるから気になる。ただ二、三メートルと言つても狭いロッテで、住宅の辺で十五メートル程の巾

であるから二、三メートルの違いは大変である。然し、隣の辻本氏にすれば、宰川氏に測量代を払って承知をして受付けたデビーザ（境界）であり、カフエーを植え付けて、ボツボツ花芽でも出てくるかという頃に抜いて植えかえろといわれても大変である。そうこうしている内に宰川氏はカリヤドールを半分塞ぐ行為に出たのであるから氣まずい思いをした事と思うが、私は直接その件について聞いた事はないし、又、辻本氏はその後すぐにその土地を売られて移転して行かれたので、大した問題にはならなかった事と恩うが、私が此処にこの事を一寸書きたかつた理由は、マツト（原始林）の中のデビーザというものはなかなか思う様にいかないものであるという事である。宰川氏のような智恵の有る人も経験のないピッカーダあけに良い日当になったと喜んだのも束の間二年も立たない中に隣同志で誠に氣まずい思いをする事になったのである。

私がこんな事を書けるのも、若い時調子に乗って失敗しかけて、あわてて少しばかりマツトの切り売りをした時の経験が有るからであるが、とに角ピッカーダで大木に行き当たると後は容易に真つ直ぐにはいかないものである。大木にあたらずにコルゴベリ迄来たとしても、コルゴベリで来るべき処に技師が杭を作って待っていても、一キロも、二キロも、マツトの中を出だしの四、五本のバリーザ（坑）を頼りに目見当でやって来てうまくぴつ

たりと行き当たる筈がない。そこで、その差を川べりから逆に「く」の字形にあげ直しておくのであるから、その事を経験してみると、境界争いは以外に少なかったとも考えられるのである。

皆さんのロッテの境界線が真っ直ぐで何事もなかったと思っけていても、エスクリツーラ（登記）の図面通りの土地というものは殆ど無いのである。唯、法律上認められている誤差内に納まっけてはいる筈であるからそれで良いのである。北パラナ土地会社の土地では幾分必ずのように大きめに測られていたとの事であつたから尚安心であつたわけだ。

第五話

娘さんの仕事で驚く

私たちは一九三九年からフレーザ地区（東部植民地）の開拓にかかった。最初は三アルケールのデルーバ（山伐り）を請負わっけて切り終つた時から此方の仕事が始まつた。道縁りから、フレーザのファゼンダの小川が近かつたので道べりに小屋を建てて、小川の水で生活、仕事は焼く前の枝おろしであつた。

二、三年は中央区からの通い作りであつた。中央区から

十二km有ったがそれを歩く事もあり、都合が良いと町からオニブス（バス）で六キロだけ歩かなくとも良いのであった。

その頃になるとオニブスも良くなっていて、横から自由に乗るジャジネーラではなく、前の入口から乗るようになっていた。然し天井が低く若し席が無くて立っている場合は頭をまげていないとつかえるのであった。

ポント（停留所）は、カーザ・ペルナンブカーナスの前であった。私たちは仕事に往来するので時々二、四丁のエンシャード（鋤）等を持って乗るのであるが、まだ開拓時代であったから、黙認してくれた。代金は六キロ乗って五百レース、カマラーダ賃が七、八ミルレースの時代であった。

町を出たオニブスが二km位来ると一寸した坂道を登るのであるが、この登った処に畠を「きれい」に作る人がいて、通るたびに一寸気になるのであった。私たちの仕事はいつも少しズボラ（横着）であったから、良くきれいな仕事をするものだ少し見習らわれないとならんと思わせられたのであった。中央区では頼則家曾我部家三兄弟に遠国家その他全く年中草らしい草をはやさず、拾い取りですむものだと言われ、何時行つて見ても除草に追われる様な事はないのであった。

そこで話はフレーザの人へ戻るのであるが、ミリーヨ（トウモロコシ）が良く出来る畠で、カフェーの間に三、四年はミリーヨを植えていたが、その収穫時期になると、今

と違つてよくエスピーガで収穫して、農閑期まで畠に保存しておくのにパルミット（パルミット椰子）を四角に組んで、その中に詰めてアロースのパーリヤ（藁）で雨の入らぬようにして置くのであるが、そのパルミットのわく組がその長さをきちんと決めて切つて、高さも我々が造る倍も高い物を作られるのであつた。

高い物を作るといふ事は屋根ふきは一つで沢山入るの
で有利ではあるが、ミリーヨを遠方から担いでこなければならぬのも、高く担ぎ上げるのに骨の折れるもので大変である。此の人は組み上げる枠のパルミットの長さまで揃えて一寸した倉庫の観があつて、どんな人が此のような仕事をされているのかと氣にかかつていた上、少しは習つて白分達も氣をつけなければと思わされたものであつた。

後に解つた事であつたが、浜本注連二と言われて、高知県から北海道に渡り、北海道から移住してきた人であつた。いい加減の年齢であり、長男は末子で小さく、三人の娘さんが主になつての畠仕事であつたので、聞いて再び感心したことであつた。

後に隣りの大久保君が言うのに、自分達は男三人隣りは女三人なのに、その女の仕事についていき兼ねて一寸はずかしい思いをする始末であつたと言ふことである。それでも此の隣同志縁組も出来ているのでめでたい。

第六話

山豚一匹 五ミルレース

それは一九三四年の事であつた。ファゼンダ・コアチーの契約者、松原松太郎氏のパイオーラにお世話になって、川向いの自分のロッテの開拓、即ちデルーバ・マツト（山伐り）に通つていた。セツテ・バーラスの入植で一アルケールをデルーバした経験から、此処では二アルケール半のデルーバをした。ムダンサが五月の二十日頃と少し早目に来ていたので、デルーバする期間も十分にあつたのである。

その頃ファゼンダの向い側に入植していたイスパニョール（スペイン人）だと言われる人が時々山豚（カテト）の肉を売りに来ていた。

ファゼンダ・コアツチーは、今のシャングリラーの事であるから向い側というのは、アベニード・チラデンテスをカンベに向つて左側の事である。

ちょうど今のセンプあたりの下の方に住んでいた通称イスパニョール（スペイン人）が、コアツチに日本人の新移民が次々と入つて来たので喜んで山豚の肉を売りに来たのであつた。

話では、彼らは皮が売れるだけで肉は沢山あつても金にならなかつたらしく、案外に安く分けてくれたので

あつた。来週も出来たらもつて来て欲しいと約束しておくと喜んで持ってきてくれたところをみると相当に居たらしいのであつた。値段はフランゴ（鶏）が一羽二ミル、牛肉が二ミル五〇〇レースの時に一頭が五ミル、半身にして二ミル半であるから安い物であつた。

肉は油気は少なくて日本から来て間もない頃の私たちには割合に食べ易かつたのであつた。

この山豚、自然のマットの中で暮らしているものを注文まで受けて持ってくるとは、何処にそんなに居るものかと思つていたが、此れは、今のイガツポのラーゴ（沼）は下の方でせき止められたので出来たもので、元は相当に広いブレーション（湿地）であつて、この広いブレーションを住み家にして沢山のビツショ（獣）が住んでいたらしいのである。

その後このブレーションの周囲も人が入つて開拓され、町の人口が増えるに従つて、そのブレーションから野菜が生産されたり、チジョーロ（レンガ）やテーリヤ（瓦）を焼く人が出てきた。

私の所で、一九三八年に父が亡くなつたので、母親が、「家がパルミット（椰子）で風が入りすぎるのが健康に悪いだらう。」と言われるので、その年の末から三九年にかけて板壁の住宅を建てた。大工さんはシャーカラ・パリヤーノに住んでいた高木と言う人であつた。此の時の瓦が、今のルア・マリンガーの突き当たり辺で焼いていた水渕氏の瓦であつた。

それ迄は瓦はオウリーニヨスカジャタイで生産されているもので、ロンドリーナで生産している人の有ることを知らなかった。ちなみに値段を書いておくと、千枚で三百ミルレースであつた。カマラーダ賃が七、八ミルレースの時代の事である。

もうその頃、入植して五、六年もするとロンドリーナはその間に急激に開拓されたので、イガツポ地帯の山脈など既にいなくなつていた。

第七話 狐に騙された話。



この話は私の体験ではないが、なかなか実感がこもっていて面白く、いつ迄たつても忘れられない。

話は入植の翌年（一九三五年）頃の事で、私の家は中央区のコアッチーの川辺りに初めて小屋を建てて移ったばかりの頃の或る日の日の出前の事、私たち兄弟がぼつぼつと起き出してくるという時刻であつた。

母が早起きして、トマカフェー（朝のコーヒー）の用意をしていた時、「お早う、お早う、ここはどなたの家です

か。」と、大声で叫ぶように挨拶する男性の声で、先ず母が「はい、お早うございます」と返事をして出る、私は家の横で顔を洗っていたのだが余り早い時刻と只事でない声に驚いた。

入口の方へ廻ってみると、私たちの後に川向いに移ってきたK氏が、晴れ着でいるのだが、その着物がくしゃくしゃの上泥だらけである。どうしたのかと、びっくりしている、K氏が恐怖の為に身ぶるいをしながら母に向って「ああ、やっぱり此処は沼田さんの家でしたか。お宅の畠には狐がいる……。」と、話し出した。その時には父も出てきて、父母は先ずトマカフェーに誘いメーザ（テール）についたのである。そこでK氏の話は続く。

「昨日三組の某氏のカザメント（結婚式）に招待されたので約五キロの道を出掛けて行つた」

氏は三組に契約農に入る契約が出来ていたそうである。

当時の事であるからピンガ（焼チュウ）での宴会で、それでも一人で夜道を帰るので注意をされていて余計には飲まず、十二時前に失礼して帰ってきたという。一組と二組の道路をそれなりに帰ると大変に遠回りになるので、私の家と石川氏のジビーザ（境界）を近道する事にしておりて来たというのである。そうすると二キロは近道である。然し当時のジビーザは、私たちも仕事にそこを通るのであるが、まだカリアドール（作道）としてあげたものではなく細い木はまたぎ、大木は廻つてという状態であつ

た。それでも畠とは違つて歩き易かった。

K氏の話は続く

そこで四百メートル程きた所が、である。「沼田さんあなたのシツチオ（土地）には狐がいる。私はその狐にだまされた。」「ブラジルにも狐がいるとは知らなかった。」と、狐、狐、狐と連発でなかなか恐怖から抜けられない様子であつたが、とに角、私たち良く知っている者の家に入っているので次第に落ち着いてきて話すには、ジビーズに入つて四、五百メートル程来たところが、思いがけない一軒の家があつた。それで、こんな所に家の有るはずがない、と、再三思い返し乍らも現実にあるのでしかたがない、そこで無言で前を通るのも悪いと思い、又、時間が時間だから声をかけるのも悪いと思ひながらも、

「今晩は」と、小声で挨拶をして通り抜けようとしたら、「どなた」と、女性の声がして、すぐに婦人が出て来られたのでびっくりしていると、

「あらKさんですか、この夜更けにどこからのお帰りですか、道らしい道でもない所ですし、やがて夜が明けますから一寸休んで、夜が明けてからお帰りなさい。」

と、親切な誘いで、「それでは」と、家の中に入り空いていたカーマ（ベット）にねかされて「助かった。」と、思つて休んだのに眠りが醒めてみると、

「沼田さん、家もなければカーマもない、狐の野郎だましやがつて、私は大木の脇の土間にころがされていたんですよ、あそこには狐がいる。」

と、全く真剣な顔での物語りである。

その内にトマカフェーをして少しは落ち着いて帰っては行かれたが、私はそんな馬鹿げた事はないと思い乍らも、本人にはどうしてあれ程思われるのかと一寸不審な気にもさせられたものであった。

それでもどこで寝られたのか確かめに行って見ると、デビーザの半頃に大きなファイゲラの木が倒されてあり、その板根とでも言おうか根の方に張り出している羽の様な板を屋根と思い、その下で寝られたらしく、跡がはつきりと土に付いていた。

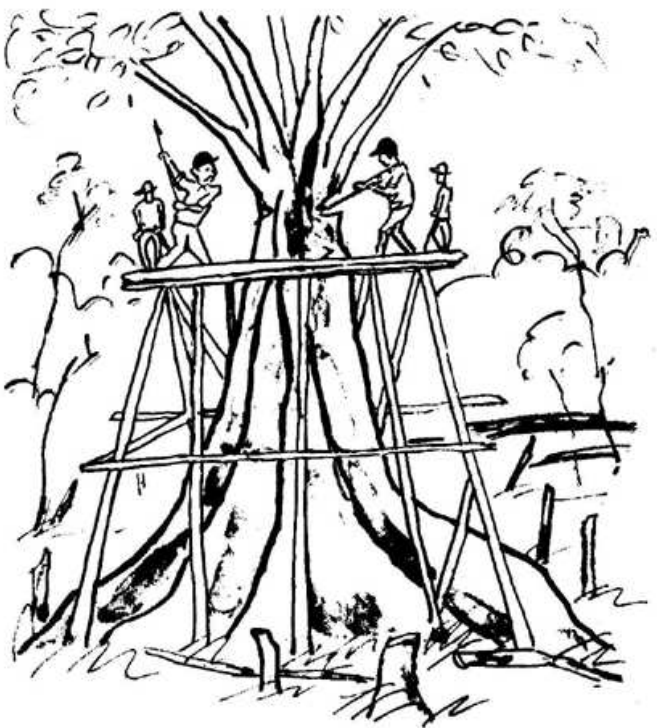
酔って此処に寝たのだから一張羅の洋服もたまらない。それにしても妙齡の婦人が出て来て「夜の明ける迄休んで行かれたら」と、招き入れてくれたと言うあたり、本人の酔った余りの想像であつたとしても面白いし、目が醒めてから私の家迄来て尚あの真剣な話振りなども何時思ひ出しても面白いのである。

そのK氏もアストルガ方面に移って行かれたが今では此の世の人ではないであろう。

(注・板根は次頁の図にあり)

第八話

曾我部氏の大木倒し。



中央区では案外に早く立派な学校を建てたものであるが、その経営費に苦勞するので、将来の為に更にニアルケーレスの土地を共同購入してカフエーをフォルマ（育成）する事になった。

当時の植民者には苦しい時代であり乍ら良く計画してくれたものである。

私が今日書きたいのは此の計画のいきさつではなく、そのニアルケーレスのデルバーダ（山伐り）を見て驚いた

事があるので、書いておきたいのである。

此のデルバードが焼かれた跡にカフエーを植えるためにリンニヤメントと言つて、カフエーを植える場所をマルカ（しるす）する仕事を青年会が請負つたので私もその仕事に出掛けた、その時の事である。

現地に行つて見るとフィゲラの大木の幹が何本もそのまま立っていて、その上の傘のようにフィゲラ独特の根を張るのであるが、その根板の集まつて出るところから切られているのであつた。誰がどうしてこんな危険な切り方をしたものか私は驚いて先輩連に尋ねると、こうして置けば物を植えるのに大木が邪魔にならないので相当得をする上、此の木はすぐに腐るから、腐つて倒れる時には余り被害は無いものだからこうして倒す方が得策だという事であつた。

然し、それにしても、ヤグラを組んで十メートルも十五メートルもある高い処でどうして切るかと聞くと、周囲に生えているパルミット（椰子）を寄り掛かるようにして切り、そのパルミットに登つていつてその頭の辺に足場をしばりつけて、その上で切るから何でもないのだという。それにしても、いよいよ上が倒れようとする時、あの高さから逃げる時間はないだろうと言うと、それは逃げずにそこにいて倒れていく反対側の切り口が開いていくのでそこに横になつて乗っていれば何でもないのでという。

それにしても私には命がけに見えるこの仕事はとても

恐ろしくて誰にでも出来る芸当ではない。上が落ちると共に足場はくずれてしまふし、直径三十メートルは越える程広がっている傘の様なフイゲーラの根板の張りであるから、下になった根が地に届いてから全体の動きがどう変化するか解らない危険な仕事である。一体誰がこのデルーバをしたのかと尋ねると、それは曾我部三兄弟の仕事だという。スポーツでの博・省一・均君の曾我部三兄弟は有名な話であるがその父親の三兄弟の事である。一人は妹の婿であつた。私は三十年近く開拓して来たが、曾我部氏らの様な大胆な、勇壮な仕事振りをする人達に出合つたことはない。その上此の兄弟は荒い仕事は大胆であるが、自分の畠の仕事や家の周りの細々した手入れは全く手まめに気を付けて居られたのには、私は自分のづぼらさを恥ずかしく感じさせられると共に色々と教えられたものであつた。

当時は中央区に曾我部三兄弟が居るという事は国際植民地の一つの話題でもあつた家族であるが、日本へ引き上げる人も出来たり、その後どうなっているのか分らない。スポーツで名を馳せた三兄弟も割りと短命で既に亡くなられてしまったのは淋しい。

それにしても、あのフイゲーラの大木の巨大な切り株が丁度帽子をとつたようにしてポツンポツンと、如何にも森の紳士然として立っていた姿は今だに忘れられない光景であつた。

第九話 ピンタードのお頭付き



一九三七、八年頃の真夏の頃、何しろ暑い時期であった。

中央区では草分け組の上、顔役の頼則家の三男勇君のカザメント（結婚式）の時の事であつた様に思う。

当時でもカザメントとなると、やはり日本人は魚が欲しい。それでよく丹俊彦君の父俊男氏がタクシー業の傍

らペスカ（釣り）が好きと言うよりも上手であった。

大ていのカザメントにはペスカに行つて決まった様に捕つて来てくれたものである。

この頼則家の時もそうであった。

或いはこの時は同じペスカ好きの頼則家の隣の吉村氏であつたかも知れない。

とにかく冷蔵庫のない時代であるから前日なら塩で保存、生のサシミでといえ当日捕りに行くしかない。それが決まった様に捕れたのだから沢山いたと言う事である。

頼則家の場合も時間を見計らつて捕りに出かけたのであるが、どうしたことかサシミ用の魚は殆んど捕れず、二十七kgもあるピンタード（虎斑ナマズ）が獲れたのだ。魚は来たが、ピンタードではサシミにならず、焼くにしても、煮るにしても二十七kgではどうしようもなく、料理人の赤松将氏は思案に余り、手伝いに集まっている人の中から、お祝いだから何とかして「お頭付き」に出来ないものかなどという意見も出たが、責任のない者は何とでも言えるが、責任者の赤松氏にすれば大変な出来事である上、時間の問題もある。

そこで赤松氏の考え付いたのは焼き魚にして「お頭付き」で出す事であつた。

私は聞いた話で、実際に見てないので、はっきり言えないが、手伝いに行つた母や招待された父や兄たちの話が

忘れられないのである。

焼く事に決まった赤松氏は、それぞれが持っているポルコ（豚）を屠殺した時にバニヤ（豚の油）を取る大きなTAXA（底が浅くて平で、廻りが大きい鍋）を用意して二十七kgの大魚を三つか四つに切ってTAXAに入れ、オーリオ（食用油）を沢山入れて煮えた油をコンシャ（シャクシ）で油の上に出ている魚の背にかけ乍ら焼くという前代未聞の方法が取られたのであるが、大きな魚にいかにして煮えたぎる油とはいえコンシャでかけた位では中まで十分に焼けなかったであろう。

ともあれ、十分に焼けたと判断して鍋から取り出され、宴会の会場で中央のメーザに「でん」と据え付けられて祝宴を待ったのだが二十七kgの大魚の「お頭付き」招待客の中にもその噂は伝わっているわけである。

当時のことで、三三九度で「謡」の一つも出て、かなりの時間を経て祝宴になるが、両家の挨拶位では乾杯にならず、日本人会長、青年会長、何々会長、来賓挨拶と相当の時間が経っていく、それに真夏の暑さであるから大変だ。

いよいよ祝宴になる、それでも日本人の常で正面に「でーん」と据わっている「お頭付き」に手を出すのは一寸おくれる。

そのうちに元気の良い人が取りに行ったか家族の人がすすめたか、いずれにしても食べる段になったのだが、残念千万、大勢の人を驚かしたり、さんざん心配をかけたり

したこの見事な大魚にいたみが来て臭いを出していたのである。

後で色々な料理法を言う人もいた様だが、それは無責任な話で、当事者にすれば最高の方法として取り組んだのであるが残念な事であつた。

それにしても、二十七kgの大魚をお頭付きで飾り付けた豪壮なカザメントはこの時以外には六十年の歴史の中で聞いた事はない。

第十話

副校長の南米移住

我が家の南米移住には色々な事情があつた様であるが、その一つに近くの小学校の副校長先生のブラジル移住も影響していたのではないかと思う。

私達の移住一年前に父の親友の本家に当たる家族が移住した。

その送別会が私の近所のその親友の家で行われた。その家族は二〇km程離れた小さな町に住んでいたが、移住のための眼の治療で既に札幌市に移っていた。

さて、その送別会であるが、既に決心して手続き万端すんでいるにも拘らず、親戚一同並びに私の父も加わって

南米移住を止めたらしいが、ついに昭和七年五月横浜を出帆したのである。

この家族に、十三歳の少女として私の妻が加わっていた事は私たちは知る由もなかった。

しかし、その後幾何もなく前述の副校長先生の移住話が聞こえて来たのであった。

そして聞かされた事は、大勢の息子を抱えて、その将来を考える時、これから開拓される広い土地のある国が望ましいと思う。との先生の言葉に考えさせられたのである。

自分も四人の息子に三人の娘を持っている。それに次男（私）は医者から見放されているものの、暖かい雪の降らない所なら或いは助かるかも知れないと思うのは親の愛情で、急激に気持が移住に傾いていった様である。

昭和八年に入ると手続きは進んで、雪が消えた四月下旬には副校長の家族が出発、その家族がまだ航海途中にある五月下旬に我々も移民船上の人となった。

共にアフリカ廻りで六十日近い航海の末、サントスに上陸、一般移民と別れて直ちにセツテ・バーラス植民地に入植した。先発の副校長先生の家族もこの植民地に来ていた。

ここで、この先生の事を紹介しておこう。この人は皆さんも長い間色々御世話になったパペラリア（文房具店）吉川氏の父親文六氏の事です。

私の父が海岸山脈を徒歩で往復して北パラナを視察し

てムダンサ（引越し）する事になったと、いう話題はたちまち植民地に拡がり、先ず同船者の方々が同じコースで視察に出る、後に続いて吉川氏も、同じコースで視察に出、氏はローランジア富士植民地に入植した。

私の父は三十才まで開拓の仕事の経験は有ったので、吉川先生は大変な事であろうと、一日富士植民地へ訪ねて行った。帰って来て、筆より重い物は持った事のない人が、パルミット（椰子）を伐り出し住宅を建てると頑張っておられ、頭の下がる思いがした。と話していたが、それから間もなくどんな病気であつたのか不帰の人となられ、遺族の母子は大変淋しい思いをされたわけである。

私の父も涙ぐんで話をしていた事を思い出す。

子息瀨氏の温厚なまじめな性格は、勤勉に勤めて信用されていかれた父母の性格を受継がれている所以と息う。吉川先生のご他界はローランジアに於ける日系人の初めてであつたかも知れない。と思われる程初期の事であつた。

子供の将来を考えて移住しながら二、三年の中に亡くなつていかれた家長の気持、残された夫人の不安は想像に余りあるが、移民にはそうした苦勞を乗り切らなければならぬ運命の人もいたわけである。

第十一話

美しい花が咲くか

それは入植して四年目位の事であつた。畠に見なれない悪草が生えなかなか繁殖が早くて困つた。メンドイン・ブラーボという草だとの事であつた。土地が良いので良く太り、種はパチンパチンとはじいて飛んで忽ち拡がつてゆくので苦勞させられたものであつた。これについて、近所の人からあやまられた事があつた。

中央区の一組は、シヤングリラのガソリンポストから、フットボールの競技場に下つてゆくアベニード・リオ・ブランコを下がつて初めに渡るコルゴ（小川）がクワツチで、渡つて左側が一組であつた。中央区としては一番後に入植したのであつたが、中央区という組織が一組の人が入植してから出来たのであつたかも知れない。三四年に一組の入植が始まつたのであるが、二組、三組、四組、などは既に入植されていた。

コアツチーの橋を渡つて左側の始まりが一番大地主の本田氏、次が市山氏、石塚氏、中野氏、石川氏、その隣が私、その隣に後フレーザ区へ移つた加藤一郎氏が居られた。既に亡くなられたが老齡の夫人は居られる。毎年農産展に格付の世話をしてくれる啓氏は子息である。その隣り、言うなれば一番奥が大西氏の土地であつた。然し大西

氏の尚奥隣りにも人は居た事がある。

すぐの隣は誰であつたか名前は判らないが一アルケール余りのデルーバ（伐採）を大西氏と私の父が請負つてたおしたものであつたが、本人は入植しないで大西氏に売却されたのでつた。

尚又その隣が、町で商売をして居られた西岡氏の所有地であり、そのカビセーロの角に中央区の共有地三アルケールス在り学校並びにカンポが有つたわけである。此の西岡氏の所有地のバツシャード（低地）で一時世話になつていた家族がハツカを植えて居た事を知っている人は少ないかも知れない。その家族の一人が現在ジャタイジンニヨからウライに向つて七、八kmの処にファゼンダを持ち、先年賀陽大使が立ち寄られた事の有る星野氏であるが、星野氏の男兄弟四、五人居られたが、今では全員亡くなられた様である。古い話である。

話は横道にそれましたが元に戻し、悪草メンドイン・ブラーボの事であやまれた事、それは大西氏の夫人の事である。

皆さんが今苦勞しているあの草は私の処から拡がつて行つたものです申し訳ないと思います。実は或る時カルピ（除草）をしているとあの草の若いのが生えていた。初めて見る草で何かキレイな花が咲くのではないかと思つて残して置いて次に行つて見たら、大した花どころかあの種がパチン、パチンとはじいて一面に散らばっていた、

それから気を付けて絶やそうとするけれども、時期なしに生えて種をはじかすのでとうとうみなさんにまで迷惑をかける事になった、という事であつた。

然し実際は分らない、大西氏の畠に一本生えたのさえどこからきたのか、その種のように他の人の畠にも、何かに付いて来ないとも限らない。とにかく草というものは昔の人が、あまのじゃくといういじわるの神さまがいてまきちらすものだと言われた話を親から聞かされた事があるが、いかに除草機が発明されても、除草剤が改良されても全くしぶとく攻めたててくるものである。

然しまた考えようによつては草取りに畠をかき廻すので物が育つのかも知れないのである。

第十二話

火の玉

此の話は開拓当初のある町での話である。

或る夜更けにバールで二、三人の日系人が雑談を交し乍ら一杯飲んでゐる内に十一時位にはなつたらしい。町には末だ電気の無い時代でランプの灯りであつた。従つて町は寝静まって暗い、昼ならバールから川向いの畠が見える状態の店であつた、という。

大いに飲み乍ら雑談をしていた内の一人が、「オイ、あれは、何んだろう。」と、言い出した。「何が見えるのか、真っ暗じゃないか、何もありやしないよ。」「いや、見える。」「どこに、何が見えるというんだ。」「あら、あそこ、ボヤツと明かりが見える。それが動いている。」「どこだどこだ。」と、そこにいた三、四人の者が、立ち上がった、見付けた者に言われ乍ら良く見ると成程、ボヤツとした明かりが見える、よく見ていると、言う通りフワリフワリとゆれ乍ら一方へ静かに飛んで行く様だ。期せずして思い、言い出したのはこれが「火の玉。」と、言うものかと言う事であつた。

思えば墓場の方から来たらしく、次第に遠くなるのは、自分の家に向っているからだ。

「ああ、火の玉とは有るものか。」「これは火の玉だろうなあ。」と言ひ乍ら、「俺明日一寸調べて見るよ。」と中の一人が言つた。そこで又一杯飲みなおしてそれぞれ家へ歸つたのであつた。

翌晩再び集まつたが、さあ大変である。昨夜調べて見ると言つた者が、そこらで聞いて見ると、誰その使用人のムリエール（妻）が急に悪くなつて病院へ連れて行つたがすぐに亡くなつて今日葬式だとの事である。やっばり、そうだったか「それで死んだムリエールが火の玉となつて子供に逢いに行つたのだ。」火の玉とは有るものだ、と言う事になり、この話が狭い町中に広がる話題と

なつたのであつた。この話、一時は相当に「火の玉事件」として、騒がれたと言う事である。

ところがである。そんな事は有る筈がないと、大勢の中には色々な人が居て、事実を探究する人が出て来た。燐が燃えるのを人魂Ⅱ即ち火の玉と言う事があるが、死んだばかりの人から燐が出て燃える筈がない。そのムリエールの死と火の玉事件と時間的に連絡が有るならと、先ずそのカマラーダの家を訪ねたところが、火の玉の正体は直ぐに判った。あの晩妻を亡くした良人はその事を家族に知らせる為に石油ランプを下げて二キロ余りの道を一且家へ帰つたとの事で、火の玉の正体はランプであつたのであるが、火の玉の話は次々と尾ひれが付いて忽ちの内に一千余家族の植民地中に拡がつたのであつた。

「化け物の正体見たり枯尾花」で、大抵の怪談は、冷静になつて調べて見ると、枯尾花的なものである。そこで燐が燃えるという実体を一度は自分の目で見たいものと思つていたら、ブラジルに来て間もない頃、アロース（米）のプランタ（蒔付）を終えたので、或る日十km程ある河にペスカ（魚釣り）に行こうと親子三人で出かけた事があつた。河は相当大的な河であつたが良い竿が有るわけでもないので岸边でのランバリ（小鮒）釣りで、何程の収穫もなく、腹を減らして夕方帰途に着くも、十kmの道には案外時間を取られて途中で日はとつぷりと暮れ

てしまった。

月は無く全く暗い夜道を急いで歩き、家に一km位と思われる処でポルトン（牧場の戸）を通る事になった。ポルトンといっても唯の細い丸太を三本程で馬の行き来をしない様にしてあるだけのもので、下の一本を一寸またげば良いのであったが、その時、父が、「それ、そこに燐が燃えている。」と教えてくれたので、良く見るとポルトンの一方の杭の元に、割合はつきりとした白い物が有った。燃えているという様なものではなく、唯棒のペダツソ（部分）が白く見えるだけの物であった。父は白い唯の棒のペダツソの様な物ではあるが、白い棒なら、この暗闇では見える筈が無い、これが燐が燃えているというものだ。と言つて、足でポンとけると、腐っているのでボロボロつと砕け散ったが、その砕けた一つ一つが、青白くはつきり見えるのであった。

炎を出して燃えると言う様なものではなく、唯一寸青味をおびた、白色に見えるだけの物であった。「これが此方が一人歩きをしていて、恐怖心を起こしていると火の玉にも思えるのだ。」と教えてもらったのであったが、怪談映画に出て来る火の玉（人魂）とは似ても似つかぬものであった。

第十三話

肺に穴があいていた

それは入植五、六年した頃の事であつた。二組の入口、現在ビーク・オーロ・ベルデとして市街地になっているが、当時は一面カフエーが植えられたシチヨ（小農場）で桜田氏の所有であつた。

或る日、突然その桜田父子がカマラーダに刺されたというニュースが飛んだ。

月末のパガメントのコンタ（勘定）の思い違いがもめごとの原因らしく、逆上したカマラーダがファツカ（ナイフ）で刺したと事である。

当時の日系人は他国に移つて来たのだからこの国の人と仲良く暮らす事と、日本人の信用を落とさない事に気を付けようと肝に銘じていた。桜田父子にしてもコンタをごまかそうなど思いもよらぬ事で、文盲のカマラーダの思い違いが原因であろうが、大怪我をしたのは此方である。早速知らせを受けた隣人が手当てをして病院に運んだ。

一寸ここで桜田氏の事を書いておきたい。この人のロッテは少し低地で三軒西側の今川氏と後日日本に引き上げた緒方氏の境あたりから出た水が小川となつてロッテの中間を横切っていた。カフエー栽培には不向きで、割合早くから野菜などを作っていた。

又近所の野菜の残りなどを買い集めてカロツサで町に売りに出て居られた。

この事件で長男渉君と二人が怪我を受けたのである。本人達が正直だという一つの証拠は、渉君がいわれたエピソードでも解るように、近所で借金してまで派手な子供の結婚式をした人があるが、僕は妻は貰ったが、金が出来るまで宴会は待つ、借金して、その借金払いに嫁と一緒に苦労するのは妻がかわいそうだ。と私に打ち明けた事がある。今思うと、私より四、五才上の彼がなんで私にそんな話を打ち明けたのかと思うが、とにかく直接聞いたのである。それから暫くして子供が二人位出来てから披露宴をされたのである。

父親も案外信仰の有った人で、私の父と、今アプカラナで大事業をしている宮崎氏のお父さんと三人でよくお寺のない淋しさを話し合っていた事を思い出す。特に私の記憶では仏教談義ではなく、お西とお東のお経の節の違いに付いて話し合っていた。三人ともお経の本を持っていたが、どこかのお葬式か法事の帰りであつたのかも知れない。入植時代はいたし方なくお経がどうにか読める人が居れば坊さんの代理を勤めてもらっていた。こうした勤勉な人が刺されたのである。

話は横道にそれたが、私は青年会の役員何人かとサンタ・カーザにお見舞いにゆくと、正面の階段を上がった左側の部屋のカーマに構たわって居られ意識もはつきりしていた。一応安心と思つたが、気が付いてみると病人の所

からおかしな音がするのである。ブクブク　ブクブクし
ばらく休んで又ブクブク　ブクブク、考えてみたら肺に
穴があいている事に気付き、私はびっくりした。

看護婦に聞いてみると、この人は傷が急所をはずれて
いるので助かると言われ、事実元気になって帰って来た
のであった。

私はこの事件で肺に穴があいていても助かるものだと言
う事を知らされた。又、外人達と僅かな損得で事件を起
こしてはならない教訓を受けたものであった。

第十四話 コアチーの智恵



その頃私たちは少々暇が出来ていたので次の小屋を建てる為の柁を割っておこうと、マットの中で、タンブリンやマルヒンの素性の良い木を選んで割っていた。

丁度その日は何かの都合で、父や兄は少しおくれるというので、私が一人でマットの中へ仕事に来了。空は既に明けて気持ちの良い朝であった。

仕事は前日に兄らとトランサドールで柁の長さに木を

切つてあるので唯割るだけであるから一人で出来るのであった。柵の割り方もその頃は隣りの石川さんに習つて一寸上手になっていた。

さて仕事を始めようと思つていると、私が今来た方からガサガサと何かが来る気配がする。

ハツと思つてその方向を見ても誰も見えない。はて、と思う間もなく、中位の犬の大きさのコアッチーが行列をなして此方に来るのであった。瞬間に此方に危害を加えそうでない動物のようで、それ程の不安感を持たなかつたが、そのかわりに一匹位捕らえる事は出来ないかと思ひ、早く家族に来て欲しいと思つている時、相手も私のいる事に気付き立ち止まつた。良く見ると相当の数である。

先頭の一匹が後方に合図の号令をかけるとすぐ道脇にあった木に登つた。後に続いて来たもの達も皆その木に登つたのであった。

木は大木ではなく枝の張りは直径で七、八メートル、高さは五、六メートル位の小さな木であつたから、二十数頭のコアッチーが登るとぶらぶらとゆれている。私は良かったと思つた、下で番をしていればその中に父や兄弟達が来るだろうと思つてその木の元に立っていると、その時である、私の後側で「どすん」と音がした。一匹が飛び降りたのであった。「ハツ」と思つてその方に目を向けると、又、頭の後側のが飛びおりる。先の逃げたのが、此方へ来いと言うのだろう、仲間を呼ぶ、私はどうしても落ちたものが気になつて、その方を向く、そうすると、頭の後ろに

いるのが飛びおりる。早く誰かきてくれればと思つて、
るうちにとうとう全部逃げてしまつて、惜しい事をした
と残念に思つたものである。今にしてみればみんな逃げ
てくれた事の方が良かったのであつた。

それにしても危険から逃れるのに相手を見て、その後
のものが交り番に飛び降りる智恵をどうして覚えたもの
か、自然界では他の動物におそわれる事は度々あるうが、
やはりその時もこの方法で助かる率が高いのであろう。
中々上手な逃げ方であつた。

みんな逃げた後で父や兄弟達が来たが後の祭りであつ
た。

その頃の私たちは何かを見るとすぐに捕らえる事に熱
中したものであるが、だからと言ってカツサ（狩）に出か
ける程の熱心さも無かつたので食べた動物の種類は知れ
たものである。家の下の小川にトラバサミを仕掛けてお
いてあの足の長い水鳥のサラクーラを捕つて食べた事な
ど、うまかつた思い出より、かわいそうな事をしたもの
だつたという後悔の方が大きい。

第十五話

猿にも信仰はあるか



私の母は四十才位から時々「頭痛」がするといつては薬を飲んでいた事を思い出す。ブラジルに来てからはいくら薄らいだ様であるが、それでも時たま「頭痛」がするということがあった。

或る日母がいうには頭痛には猿の頭のムシ焼きが利くと日本に居た時、話にきき調べてみると大変高くて買え

る物では無かったという。

母がその話をした頃は中央区は既に殆ど開かれていて猿を見かけることは難しい時代になっていたが、一九三九年にフレーザ区、当時は東部植民地と呼んでいた処の土地を、親戚から買い受けて開拓を始め、四三年頃弟たちと共に引越した、兄は中央区の既成コーヒー園に残り、弟たちで新しい土地を貰って開拓する事になったのであった。カビセーロの四〇〇〇株のコーヒーは既に三年生になっていて、忽ち収穫も有る様になり張り合いの良い出発であった。

此処の土地は十七アルケールスもあつて全部拓くには数年かかるのだが、その残っているマット（森）の続きの川向いが大きなファゼンダ（耕地）のマットへとつながっていた。このファゼンダのマットにはまだ猿がいると言う話をカマラーダがするので、いるなら頭一つに付幾ら払うとオフェルタ（値をつける）すると、そのカマラーダは喜んで次の日曜には取ってくると張り切っていたが、いざ捕らえようとする、そう簡単に行きあわないと言うのである。それでも二、三週間後にとうとう頭を一匹持って来たのであるが、猿はもうとらないと言うのであった。

私は一匹幾らなら悪くないだろうといってもプレッソ（値段）ではない、幾ら増してくれてもだめだと言うので何があつたのか一寸気にはなったが、兎に角一つは手に入つたので、ソーダの空かんに入れて相当時間をかけて

焼いた。

早速粉にすると油氣が有るのか光沢のある粉になり、中央区に住んでいた母に届けたが服用したのかどうか、届けた直後に脳溢血で倒れ入院して一週間目に亡くなったのであった。

それから相当後の事であるが、弟の政治が猿に出あった話をするのであった。

鉄砲を持ってカッサ（狩）に出かけると、或る日サルの一群に出あった。鉄砲を向けると、ねらったその猿は一寸枝にかくれる様な仕種をするが、しばらくねらっている、此方を向いて手を合わせて拝むというのである。尚続けて鉄砲を向けていたら背中の子供を両手で抱いて、子供がいるから撃たないでくれと頼む仕種をする。それで鉄砲をかくすと急いで逃げようとする。又鉄砲を向けると、再び手を合わせて拝むと言うか助けてくれとの仕種、そして子供を前に出して見せるので一寸撃てるものではないと言う事であった。

ただ子供を助きたい愛情だけなら、子供をかくすべきかと思うが子供がいるので助けて欲しいという仕種は他の動物にはない仕種の様であり、やはり人間に近い智恵があるものか、何か信仰らしい考えもあるのではないかと思わせられるのである。

前に猿を獲るのは嫌だと断られたのも、似た様な事があったのかも知れない。

第十六話

中央区共有地競売さる

中央区では将来の為に二アルケーレスの共有地を購入して、カフエーをフォルマ（形成）してあったので後には青年会も大変助かったものであり、又、その共有地が今日のセントラル・ルビアセアの六アルケーレスとなつていたのであるが、此の共有地も、初期には色々とデスペーザ（出費）がかかったらしくその為に共有地反対の意見が高まつて売りに出された事がある。

此の土地のフォルマカフエーは、現在アプカラナにて大事業を經營している宮崎氏の家族が引き受けて四年契約でフォルマしたものであるが、契約が決まつてマツトをデルーバにかかる、先ずそのデルーバ代がある。カフエーを植える為に、その植える場所四メートル×四メートルに印を付けるリンニヤメント代が必要、これは青年会が経費稼ぎに請負つた。その後でカフエーを植える穴掘りと、穴を覆うタンパ取りの仕事をしていよいよカフエーの種蒔きになる。これまでの仕事代が地主の仕事で、その後を契約者の仕事とするのが当時の一般の請負い方法であつた。

従つて、その経費の掛かる事は植民者一同の知る処であるが、何しろ苦しい入植当時の事であるから、何人かの役員を引受けられる人達の生活は安定していても、生活

の苦しい人々からは共有地の開拓を少し後にして欲しい人もいるわけだ、それを早く拓いておけば早く利益が上がってくるかと急ぎたい人達との間で意見の食い違いが表面化してきて会合毎にかなり荒れる様になって行ったらしく、遂に共有地開拓が座礁する事になった。

仕事は既にデルーバも済みカフェーのコーバ堀りの段階に来ているので中止するわけにもいかない、結局売ってしまつて買った人が仕事を続ければ良いだろうという意見に押しまくられて、競売にする事となつて買い手を捜し集めて或る日入札で清算する事となつた。私は入札の日付の覚えはないが、当日は植民地の役員も相当数集まり買手は植民者の中に何名かと町からも二、三名は来たのであらうと思われる。私の父は、売る事になれば、此の土地は地続きの西岡氏の物となるであらうと予想していた様である。

入札には予想通り西岡氏も来ていて入札するが、フタを開けてみると誰の予想もはずれて、買う能力の有ると思われない二組の西谷峯造氏に落ちたのであつた。役員には支払能力に付いて不安を持つ人も有つたらしいが、本人が、「私に落ちた以上、何とか金策は責任を持つ」と言う事で売却に決定して一同散会した。

ところがである。約束の期日が来ても西谷氏には支払能力はないのは分かつていたが、氏から意見が出て来た。「私が一番高く入札したのは、買う意志ではなく第三者に

渡さない考えからであつた、此の土地を今手放したら永久に植民地には戻つて来ない。私は植民地の将来の為に落札したのもう一度役員は考え直して此の土地を持ちこたえる事を相談して欲しい。」

との西谷氏の意見をきいた役員会は、難しい問題で反対派に押し切られての入札だったのであるが、西谷氏の手には有つた一ヶ月余りの間に経費の支払法に付いて苦しい人に支払いの余裕でも付ける事に考え付いたのか、その間の細かい事は青年であつた私には分からないが、一応入札にまで運んだ共有地が西谷氏の機転で元に戻つた事は事実である。然しその恩恵に報いられる事もないうちに氏は黄泉の人となつてしまつた。又、その家族も移転されてしまつて、今では中央区とは縁の無い人になつてしまつた。何か気の毒な気がしてならない。

蛇足ではあるが、此の西谷氏の処に去年あたり迄フエーラに夫婦で出ていた本柳氏が独身で奉公していたのであつた。良くあれだけ働けるものだと感心して見たのは私だけではないだろう。その本柳氏も昨年他界してしまつた。

両者の御冥福を祈る。

(九四・十二月)

第十七話

百km余のムダンサ（引っ越し）



昭和八年八月、セツテ・バーラス植民地の一番奥のマンパ―ロ区のその又一番奥のロッテに入植した沼田小一郎、大西信太郎、加藤一郎の三家族が、その年の年末から正月にかけて北パラナ国際植民地を視察して帰り、その土地の肥沃に驚いて、早速移動するというニュースが忽ちに植民地内に流れた事は事実である。その証拠には正月早々私の父ら三人が視察から帰ると、直ちに同船の宮崎、

遠国、石川、佐藤氏らが視察に行かれたし、後を追って同じ道を山越えて視察に出る人達は何組もつづいたのである。四、五人の組で、私の家を中継地として一晩泊まって未明に出かけた人達が、五月の私たちのムダンサ（引越し）迄続いたのでもわかる。

植民会社としては、植民者を落ち着かせないと地権が下付されないらしく、何とかして引き止める事に努力するのであるが、パラナの実情が知れたのでどうしようもなくなった。私たちの第一陣は何も知らずに正規の道を二十四kmも歩いて出て、やっとカノア（丸太舟）に乗れる処まで来ると会社の某植民係の張り番が出ていて、捕まって、残金に対する一ケ年の利子と次年度のプレスタソンを払えとの強行催促である。

立腹したのは若い大西、加藤の二人であった。

「我々はそれぞれロッテの三割近いものを開拓して、尚一応の住宅も建てて置いて来たのだ、若し良い植民地であれば、此の仕事代は生きてくるべきもので、一ケ年の利子や次年度のプレスタソン処の金額ではないから会社は次の人に儲けて売ったら良からう」

との正当な応答であったが、容易にまとまらないので、年長の父が仲裁役となり、「一応幾らになるのか計算を出して貰いたい」と切り出して、出て来た金額を半分にて折り合い付けるべく大西、加藤氏と相談して持ち出した処、若い会社員は「それではだめだ」と応じないのであった。そこで、父の意見で全額払うととても彼方に行っても

入植する事が出来ないから、半金は後払いという事で証書にして呉れるようにという事で承知してもらって、やつと、蒸気船への乗換え時間に間に合う時間にカノアへの乗り込みが出来たのであった。夜中の二時頃であった。

この三家族のムダンサを皮切りに植民地の大移動が始まったのである。吉川氏ら一団のローランジャ入植、一区への高地、宝田、安達氏ら、ルア・セルジツペで現在も理髪店を経営する緒方氏もそうである。カーザ・アズールの西岡商店、木井洋服店（現在バザール）、亡くなったが製菓業の西島氏に村本さん一族、ローランジャの岩倉一家、詳しく数えたら随分多勢の家族が此方に来ているが、中には他の方面に行かれた人も多いわけである。然し、その多勢の希望に燃えたムダンサを見ていて経済的に出られず涙を吞んでいた人もある筈である。

兎に角不便な処で、ムダンサといっても降って、舟でジユキヤ迄来て、そこなら汽車でサントス、サンパウロと廻って目的地に行くのであるから大変である。そこで先ず視察は家長の仕事で歩け歩けと言う事で反対方向に、パラナピアカーバ山脈をインジオラの歩く道を数十km余、車道を四十数kmと計百km余を徒歩で登って平原のイタペチニンガへ出たわけである。

ところが此のけわしい山脈を六十才を過ぎた老人夫婦に子供孫と十三、四人で小さい子を背におんぶして、とぼ

とぼと自炊しながら何日かけてムダンサしてきた家族が居た。野宿をすればオンサの遠吠えなども聞くものであるが、動物の恐れる火をたきながら火を中心に、或いは二ヶ所に火を燃やしてその間に休む様な事をしてきたものと思う。私も経験は有るが、マットの中の野宿は淋しいものである。海岸山脈は殆ど毎日の様に夕立が降るものであるが、それをこの家族は自炊しながら何日もかけて兎に角ムダンサして来たのであった。私はこの人と近所に暮らしながら、その時の状況を詳しく聞いておかなかった事を残念に思っている。此の家族の一人は現在ジャタイのコロ・デ・ボーイにファゼンダを経営する星野一家であった。

此の時の両親兄弟は皆既に亡くなられてしまった様である。背におんぶされていた孫さんは居るであろうが記憶はないであろう、移民の消えて行く昔話である。

第十八話

塩辛と梅干し

今でこそ、日伯間が飛行機で一昼夜の距離になり、その上、輸入税が下がったので、日本品に余り不自由をしなくなっているものの、一九六〇年代或いはもっと後迄も日本品は珍しい物であった。

それが更に逆上る事二〇年、一九四〇年頃の或る日、知人が、

「こんな物を貰ったのですがあなた方は食べられますか。」
と、魚の卵の塩辛を出されたのであった。私共北海道の者には塩辛は大好物である。北海道では特にイカの時期には軒並みに塩辛を漬け込むのが習慣であったものが、パラナに来ては魚に縁遠くなつて不自由して居るので大御馳走として頂いたのであった。と、帰りに、
「あなた方には御馳走といわれるが、良かったら、全部持つて行つて食べて下さい。私達九州の者には口に合わないと言うより、メーザ（食卓）の上に無い方がいいのです。」

と、言われて全部もらつて帰つたのであった。私たちにブラジルに来て初めて頂く大変に美味しい塩辛であった。

さてその塩辛の原料であるが、聞いて吃驚り、何とマンジューバの卵であつた。（注・ワカサギくらいの魚。リベイラ川の特産）

一キロの卵を採るのに何百匹では足りないだろう、おそらく何千匹のマンジューバから集めた卵の塩辛、製造した人も儲ける為には出来る仕事ではない。おそらく此の人も北海道か東北の人で、塩辛塩辛と思い語めている内にマンジューバの卵に気が付いたのであろうが、辛抱強くあの小さな卵を集めて作つてくれたものである。従つて売り出されたものではなく友人に僅かを進呈され

たもので、私共は幸いに嫌いな人が戴いて居たので御賞味させて頂けたのであったが、あれが最後で二度と手に入れる事は出来なかった。

人間とは欲しいと思うと何とか考え出す面白い智意を持っているものだ。

又、日本品の不自由で思い出す事が一つある。

一九四三年の十月頃であつたろうと思われるが、妻が妊娠して「梅干しが食べたい」と、言うので、「よし買つて来てやろう」と、買い物に出たついでに捜して見ると、どここの店か覚えていないが見つかった。ブラジル梅の無い時代であるから、純粹の日本品であつた。誰か日本帰りの人の持参した物が売られる事になったのかも知れない。兎に角見つかったので有難く数個買つて来たわけであるが、その値段が、一ケ、三ミルレースであつた。一人の百姓のカマラーダ賃が弁当持ちで七〜八ミルレースの時代、ミリーヨ（トウモロコシ）が一俵七〜八ミルの時代であつたから一ケ三ミルレースの梅干しは相当の値段であつたが病氣でもしなければ買えないので、有ってくれた事が有難かつた。

もう一つ金目で思い出す物がある。一九四四、五年の頃であつた。

少し仕事が増えたので、近所の人の世話でイタリア系のコロノ（小作）を入れると、このコロノのムリエール（妻）が、珍しい事に「私の家では錆びないガルホ

（フオーク）とクリエール（サジ）を使っている」と言つて、私の妻に見せてくれたというのであった。当時の我々一般人の使っていた品物はブリキの様なもので、洗つてから良くふいて置いてもよくサビが出た物であったから、サビない物が有れば有難いと息つて次に町に出た時に金物屋を捜して見たら、一本が九ミルレースで、びっくりして手が出なかつたのであった。

家のコロノはサンパウロ州で相当な地主であつたというから楽な時代も有つたのであろう。

人柄の良いイタリア系の人であつた。

第十九話

弁論大会



国際植民地聯合青年会で昭和十二年（一九三七年）二月頃第一回弁論大会を開催した。会長は中央区の石川泉氏であつたと思う。

此の弁論大会が開催されたのは、九月にサンパウロ市で第一回雄弁大会が催される事に刺激されての事であつたろうと思われるが、実際にはこの年の全伯大会には弁

士を送っていなかった。経費の出どころが見付からなかったのであらうか。

それとも全伯とは関係なしに国際植民地内の大全が催されたのであったかも知れない。

そして翌年一九三八年二月十三日に「北パラナ国際植民地聯合青年会第二回弁論大会」が、中央区に新築間もない学校で開催された。

此の時から上位三名の者をサンパウロ市で催される全伯大会に出場させる事となっていた。

此の年はローランジャ市郊外のカフェーザール植民地の手島丈夫氏と現在マリंगा郊外のフロレスタ近くに住んで居られる平田務氏と私がやっと三等に入賞して此の三名で、九月四日の第二回全伯雄弁大会に出場したのであった。会場はイタリア系の人の建てたリラ・クラブで大きな立派な会場で一千人余りの聴衆が集まっていた驚いた。

結果は平田氏が九等に入賞し私共二人は落選であった。旅費を出して頂いて行きながら何とも申し訳の無い気持ちであった。

私がこの一文を書く気になったのは、なにも私たちの成績の事ではなく、その翌年の一九三八年、即ち戦争三年程前にどうして第三回大会が普通に催す事が出来なかったのか、という事からである。

第三回大会は一九三九年二月二十六日に、ローラン

ジャ郊外の旭植民地の高野功氏のシツチオの、住宅から百米近くも川辺に下ったパルミット建ての物置を片付けて、人目に付かない様にと気を配って開催されたのであった。時の聯合青年会の会長は中央区の頼則勇氏であつた。温厚な方であつた。

私はいま、この項を書き乍ら思う事は、何故開戦二年半以上も前に当国の官憲にその様な配慮をしなければならなかつたのか、と言う事である。日支事変は長期化していたけれど、日伯関係がそれ程悪化していたとは思われないのである。

然るにその年の全伯大会は残念にも中止されたのであつた。

日本の国際連盟脱退、日独伊三国同盟締結等が行われていたのか、いずれにしても、日本人の集会は人の目にふれない様に注意しなければならない状態になって来ていたであろう。

従つて我々日本人の不自由は開戦三年も前から始まっていた事になる。日本語学校の閉鎖等もその頃であつた事だと忠つていたら、一九三八年九月に書かれた本の一頁に、最近邦人小学校に於ける日本語教育の困難云々の記事が見つかった。開戦三年以上も前の事である。

学校が閉鎖されたので、教師の巡回教授だとか、かくれた方法が考えられた、嫌な時代がくるのであつた。

(註)

第二回弁論大会の催された中央区の学校は、その後、幾

多の歴史の末、現在のロンドリーナ市セントラル、ルビアセアの会館として移動して利用されているのである。粗末なものであるが入植初期に先輩が苦勞して建てた記念物なのである。

第二十話

ラッサにかかった上田一郎

ロンドリーナは新開地であつたから大工仕事はあるというもののまだ開拓四、五年の早い時期に何人もの大工さんが居られた様である。建築大工さんでは座光寺与市、上田一郎氏、指物では大西氏がセルジッペとペルナンブーコの角に居られた。

座光寺氏の請負で中央区植民地の学校が立つた。此の時上田一郎氏と誰かもう一人の大工さんが来て居られたと思う。座光寺氏が請負ながら他の二人と計三人で、働いた日数で分け合う共同仕事だったらしい。上田氏が「座光寺氏の請負はいつも少し安すぎて良い日当になりにくい」と、ちよつとこぼしていた事が有つた。が座光寺氏は人に好かれただけに、無理な値を取らなかつたのであろうと思う。だからと言って、この上田氏も決して高い仕事をしたのでもなかつた。私の処では中央区もフレーザでもカ

フエー倉庫を建てて頂いたのであった。

良く此方の事を考えて働いて下さるのには助かった。私の仕事の場合、みな切り込みはセラリアの一隅で済ませて運んで来たものであった。私は倉庫であるから材料はプリメイラ（一級品）を使って欲しいと依頼したが、ノータには相当のゼグンダ（二級）材が来ていたので安く出来上がったのであった。

だからと言って、材料は殆どプリメイロ材であった。どうした事かと詳しく尋ねてみると、三メートルの柱に四、五メートルの長い物を買って良い処で三メートル取り、キズの所で力のはいらぬ所に使う様にしてあるから、強力さとしてはプリメイロと変わらないとの事であり、私も見て上手な使い方をしてあるものと安心したのであった。

此の上田氏が自転車を通っていたのをある時期からオートバイに変えられた。

植民地の仕事は五乃至十キロは通わなければならないので自転車は大変であるから、オートを買われて良かったと思ったが、オートは良く走るので危なくはないかと尋ねると、「別に危ないと言うものでもないが、一度牛おいのR A C Oに引っ掛かってひどい目にあつたよ」と話す事はこうであった。或る朝いつもの様にオートで仕事に出かけて町をはずれた処、道のわきに居た外人の若い者が「オーイオーイ」とあわてて何か叫ぶが何の事か分からないでその方を見ながら走っていたら、なんの事はな

い私も運転していた若い者も共にボーンと放り出されてしまい、主人を失ったオートも少し走って引っ繰り返ったのであった。

突然の事で何がおこったのが解らないのである。道べりで何か叫んでいた外人が飛んできて怪我はどうかと心配してくれるが、幸いに二人共すりきず位ですんだらしいので良かったわけであるが、一体何があったのかと落ち着いて聞くと、そこにいた外人が、前日使ったラッソ（牛をしばる縄）を洗って干すのに道の両側の木に張り渡して干していたとの事である。まさか、こんな早く人がオートで来るとは予想もつかなかったと言うのである。やはりこの事件も人間の少ない開拓時代を偲べる事の一つであろうかと思う。

後日談になるが、この上田氏は若い内は出かせぎをし乍ら、ヅツケ・デ・カッシーヤスの自分の家の奥に家具製造の工場を作って、長くまあまあの家具を注文に応じ造って人に喜ばれていたのであった。

特に私は一言ここに書いて残しておきたいのは、この工場の諸機械が全部氏の手製でそれが全く立派に製作されていたのであった。

今此の文を書きながら若しその機械が残っていたならば、移民資料館用に最適だと思ふのである。セーラ・フィッター、回転プライナーその他、全く精巧に造ってあったものである。晩年神経痛で足の指が痛むと苦勞されていた事を思い出す。

第二十一話

サルの子捕り

ある日、隣りの石川氏に何かの用事で行くと地上七〇センチ位の四本の杭の上に七〇センチに一メートル位かの新しいガイオーラに、動物が入っていたので近寄って見ると一匹の猿であった。

どうして捕らえたかと尋ねると、猿はマット（森）の木の上を逃げる時は早いが、地上を移動する時は人間程走れないので、畠で仕事をしている脇を此方のマットから、畠の彼方側のマットへ一団になって渡って行く処を見つけて迫いかけたら簡単に捕らえられたと言うのであった。地上を追いかけた事のない者には信じられない事であった。物事すべて経験が大事という事である。

この猿、家族がみんなでかわいがるので良く慣れて、時には戸のシャーベ（鍵）をかけ忘れるとガイオーラ（檻）から出てくる事もあるが逃げては行かず、しばらく遊ぶと自分でガイオーラに帰ってゆくとの事であった。

そうして良く慣れてきた頃から石川さんの家族が考える様になった事は、「家族から放して可哀相な事をした。」と言う事であった。

そこでマット（森）へ連れ出して放してやれば、動物の本能でサルの群れを捜して行くかも知れないと思って、時々サルの群れのくるマットに連れ出しても石川さんか

ら離れようとはしないのだそうである。或る時、サルの一
群が来た時、「今日だ」と思つてガイオーラから出して、キ
ヤツキャツとさわいでいる群れの方に追つてやつても行
かなかつたそうだ。

自分の一族でなかつたのか、一族から一度離れた者は
再び仲間に入れないきまりらしいものでもあるものか。

結局このメスザル、一生を石川さんの家で空腹な思い
をする事はなかつたろうが一匹で淋しく一生を送つて
行つたのであつた。

石川氏も捕らえたことを後悔して居られたが、兎に角、
荒山への入植当時は、動物を見ると何でも「それっ」と追
いかけて殺して食べたものであつた。それだからとて、そ
んなに食べる物に不自由していたわけでもないのに、ど
うしてあんなに動物を殺したのだらうかと思う。ある時
兎を追いかけて捕らえて食べてみたら、堅い肉で食べら
れない様なもので、何故殺してしまつたか、放しておけば
かわいいものをと後悔した事もあつた。又夜通しかけて
タツ（アルマジロ）を捕らえて、料理をして気持ちの悪
い思いをした事もある。その件は別の項に書く事にする。

又、或る時、小さなタマンヅア（蟻食い）が一寸した木
に登つていたのを見付け、木を倒して殺してしまつた事
もある。動物のカッサに行つた事はないが、畠に出て来た
ものは良く殺したものだ、どうしてあんな殺生な事を
したのか悔やまれる、娯楽が少なかつたからか、人間が案
外殺生に出来ていたのか。

ある時石川さんの隣りの人、宴会では一杯飲むと良く俺は九州男子だと胸を張る中野謙次さんを訪ねると、羽を拡げると優に一メートルはある白鳥を料理する処であつた。

中野氏の話では少し前、家の上を白鳥の一群が飛んで行つた、中野氏が急いで鉄砲を持ち出してうつと一羽が落ちてきただけで残りは飛んで行ってしまつて惜しい事をしたと言うのであつた。私はまだ一羽で良かったと思つた。何千キロも渡つて行く鳥の中の一羽であるが、こんな美しい白鳥を殺してはかわいそうと思つた。

然し私も鉄砲を持っていて、白鳥の群れが飛んできたら、やつぱり一発撃つたであらう。あの時代は兎に角動物を見たら殺したものであつた。此の頃の様なセンチメンタルになるのはやはり老いた故であらうか。

そうばかりも言えない、あの時代でも、追いかけて捕らえたり、殺したりした後では、後悔をしていたのである。

第二十二話

木の洞に発砲

戦争中かくしてあつた鉄砲を出して来てリンペーザしてみると、良く油をふりかけてあつたので大してサビも出ず使える状態であつたので棚の上にのせてあつた。

鉄砲とかピストルは護身用に必要なものと言う人が居るが身の為より怪我をする事の方が多い位に思われる事もある。私のファゼンダの隣り向かいに土屋という人のシッチオ（小農場）があり、そのシッチオの契約農に阿部と名乗る人が入って居られた。男の子が多い家族であつた。此の人も用心の為かカッサ（狩猟）の目的か、一丁の鉄砲を持っていた、中々立派なものであつた。或る日ロンドリーナで働いている一人の息子さんが、二百数十キロもあるその親の家に遊びに来た。毎日退屈するので或る日その鉄砲を持ち出してカッサに行き、帰って来て、此の鉄砲はトラーバ（安全装置）にデフェイト（欠陥）があるから危険だ、弟達には使わせるな。と、注意をされていて、翌日又その鉄砲を持ってカッサに出掛けて若い命を落としてしまった。

小鳥でも撃つたのであろうが、飛び出した散弾が砲身の途中に詰まり中の空気の圧力でトラーバがはずれて、カルトショが後に飛び出して眉間から頭の中に入ったのであるから可哀相にも即死であつた。

兎に角、形は変わっても銃器での事故は多かったものである。私の処でも戦争中かくしておいた鉄砲が、錆びついて使いものにならなくなっていてくれたら良かったのであるが、不幸にして保管が良かったので錆びつかず利用出来たのが悪かった。

或る日カルピ（草取り）をして居ると案外大きなトカゲが出て来たのである、

「おおい、トカゲだあ」

という声に、兄弟三、四人で追いかけたのであった。そうしている内に一かかえ程の木の脇に沿って走るの、ここで捕らえられようと思ったら、その木は途中から洞になっている一寸深そうな穴である、その穴にもぐり込んだのであった。

よしこれで捕らえたようなものだ、鉄砲を持って来いと兄の言い付けである。私が走って鉄砲を取ってくる、他の兄弟は穴の入口を棒でたたき乍らトカゲの出でこない様にして待っていた。

私が鉄砲を兄に渡すと、兄は筒先を洞の中に入れて、照準を穴の先の方に向けて一発ぶっぱなしたのである。私たちはトカゲが飛び出すか、中で死ぬのかと、次の瞬間の事をかたずを飲んで見ていたのであるが、バーンという音と共に出現したシーンは全く予想の出来なかったものであった。

「あつ」

と叫んで鉄砲を撃った兄が、自分の両眼をおさえてフ

ラフラツと倒れてきたのであつた。

「大變だ目をやられた」

と言うのである。打ち出した火薬の圧力で、ホコリがバァーと吹き出して来て目を襲つたわけである。いっときして歩けるようになってから家に引き上げて洗眼してみたら大事に至らずに済んだが、

「俺はあの時メクラになつたと思つたぞ」

と、恐怖を語っていたが、その時私たちは鉄砲は決して穴の中に向けて撃つものではないとの教訓を受けたのであつた。

トカゲはどうなったのか、兄の眼の事の心配でトカゲの事はホツタラカシになつてしまったのであつた。

第二十三話

ペスカの練習



日本から来て三ヶ月程した頃、或る日曜日「ペスカ（釣り）に行こう」と、隣りの大西親子と、私達親子、計五人で八キロか十キロ位の所に流れていた川へ釣りに出かけた。竿はマツトに自生していた一寸不格好な竹であった。釣針やテングスは日本から持って来ていたのかも知れな

い。

川は二十乃至三十メートル位のかんりの河で、人家は少ないし、魚のいそうな河であつた。

私は余りペスカの好きな方ではないので、大して釣れないが場所も変えずに、ランバリー（小鮒に似た魚）を五、六匹捕つた位のものであつたが、父は下の方へ移動して、二十センチ程のサルジーニヤ（いわし）に似た魚を五匹程と、ランバリーを少々釣っていた。

大西氏は川が曲がつている所で一生懸命に頑張つていた。糸をあるだけ接いで川の半ばめがけて一生懸命投げていたのであつた。

「エイツ」と、気合をかけては投げているので何が獲れているのかと思つて、大西氏の近くへ行つて見ると、なる程一生懸命になる理由があつたわけである。

川がクルバ（曲がつて）しているその曲がりの真ん中辺で、七百グラムから一キロはあろうかと思うきれいな魚が、「ピョンピョン」と、はねて遊んでいるのであるが、糸も重りも少し不足で、五、六メートル手前に落ちるし、一つも食いつかないのである。五、六メートル位の処、たまには此方の気持を考えて食らいついてくれても良さそうなものを、それが「ピクツ」とも食いつかないから頭にくるわけだ。

私たち親子は勿論糸の余裕もないので、相変わらず岸で辛抱していると殆どランバリーではあるが少しは釣れた。

さて時間が来て帰る事になると、残念がるのは大西さんである。「良し、来週は釣ってやるぞ、今日此の川がこれだけの水量のある川とは知らなかったのも、日本から持参した車竿を持って来なかったのが失敗だった。来週こそは。」と、来週に期待をかけて、手ぶらの帰還であった。私たち親子は小魚ではあったがまああの収穫であった。

それから二、三日して大西家の前を通って用たしに行こうとすると、家の前のエストラダ（道）で、真新しい車竿を出して、釣りの練習をされているのであった。何事も練習が必要とは思うが、道路での釣りの練習は始めて見たものであった。行きづまりのエストラダで人さえ自分達以外は殆ど通らないので心配はなかった。

土曜になると、大西氏が来られて、明日もペスカに行こうとの誘いであった。

それ程好きなペスカではないが、仕事が忙しいわけでもなし、大西氏も十キロ近く行くのに連れが無いのも淋しかろう、と同行する事にした。

朝早く母に弁当を作ってもらって、前回と同じ場所に向ったのである。

大西さんは、あのクルバに挑戦する事になり、私達は下の方へと、帰る時間を決めて別れ別れになって始まったのであった。

父は下へ下へと下がって行く、私は、大西氏の一週間の練習の結果も見たいので、当分は大西氏の姿の見える辺

に陣を取った。此方は相変わらずランバリー釣りであるから、二メートル程のベンガーラの様な竿で間に合うので簡単だが。

大西氏は、一週間の練習と、竿が良いので相変わらず魚のハネている川の間迄、今日は気持良く届くのであった。

ジャボーンと、重りの落ちる処を見ると、魚の跳ねる四、五メートル上で、恰度理想の場所である。跳ねる魚は一匹や二匹ではない群れで遊んでいるのであるが。「アラ不思議」魚の奴、目の前に来る餌に喰い付かないのである。大西氏にすれば目の前に、一群の魚が跳ねて見せるのであるから、場所を変える気にはなれない。

一生懸命努力してみたが結局空のビクを下げて帰る事になったのであった。一週間エストラダで練習したのにガッタンである。

後日、或る人が、「魚ははねて遊んでいる場所では釣れないものだ。」と、言われたが、私には素直に納得出来た。

第二十四話

蒔かぬ西瓜が生えた



一九四二年、我が家もようやく世間並みの待望の、カ
フェーの収穫が、一千俵の線に届きそうになって来て、張
り切って働いていたが、六月十九日には「ぐうん」と気温
が下がって、翌二十日の朝には畠に霜柱が立って落ちて
いるカフェーの実が霜柱の中にかくれるというような、

所謂大霜が降りた。又、追いかける様に七月十一日にも来て殆どの人のカフエー樹は真つ黒に焼けてしまったのであった。

カフエー一千俵の夢、やや人並みになれる夢が、一夜に消えて、全くガツクンであるが、力を落としておれないので、焼けたカフエーのブロット（芽）を育て乍らセレアイス（穀類）で出来るだけ埋め合わそうと頑張ると、ちようどカフエー一千俵分の金額がセレアイスで挙げたので母にも喜んでもらったのであった。

此の年にはおまけが付いたのであった。セレアイスを植えて、カルピをしていると、チグエーラ（ひとり生え）の西瓜が一面に生えてきたのであるが、その年は例年と違って、新しい種を植えたようなきれいな生え振りなので、フェジョンの中は残さずけずり、アルゴドン、ミーリヨ、アロースの中の西瓜は残してみたのであった。

正月過ぎた頃から、畠中西瓜で何千個あるのか分からない状態、売るつもり物ではなく、「蒔かぬ種が生えて実った」のであるから町の知人に配って食べてもらっていたら、西岡商店の主人が、

「勿体ないからフェーラ（露天市）に出して売りなさい」

と、教えられて、カロセーロ（馬車追い）を頼んで運んでもらって売る事になると案外良く売れるので面白くなって毎週フェーラに出た。又庭でも売る事にしてカロセーロ等に連絡すると家まで買いに来てくれる人もいて相当数売った事であった。兎に角チグエーラあるから

色々な形の物が出来たのではあるが、ビツシヨ（ウジ）も入らず、末なりの小さな物までが真つ赤に熟したので、良く買ってもらえたのであった。

西瓜が終る頃思い掛けなくカローサ一台馬から馬具迄揃えて買えたのであった。現今カミニヨン（トラック）を買つてもあの時代のカローサを買つた喜びはしないのである。

又此の年の思い出にこの西瓜売りにフェーラに出た時、フィスカール（監督官）が廻つて、お金をミルレースだとか、百レースをウントストン。一ミルレースをデストンと言つてはいかん、クルゼーロと言うようにと注意されたものであったが、クルゼーロに変わったのは一九四二年であつたのかも知れない。

又、沢山の西瓜が粗末になる事が目に見えていたので、レーニヤ（薪）は沢山ある時代であつたので、夜昼火を燃やしてタンボールで西瓜の汁だけを煮語めて西瓜糖を作つたものであった。此の西瓜糖が我が家では十年程醤油の色と味付けに使つたのであった。中々味の良い物が出来たのである。

尚又、蒔かぬ種で儲けさせて頂いた時、今は亡き母の教訓があつた。

「今年儲かつたからとてお前達のような百姓の経験の浅い者が、西瓜で儲けようなどと考えてはだめだ、つる物には、当たり年があつて、今年の様にチグエーラでも儲けさ

せてくれたが、つるものは難しい物であるから気を付けよ。」との事であった。

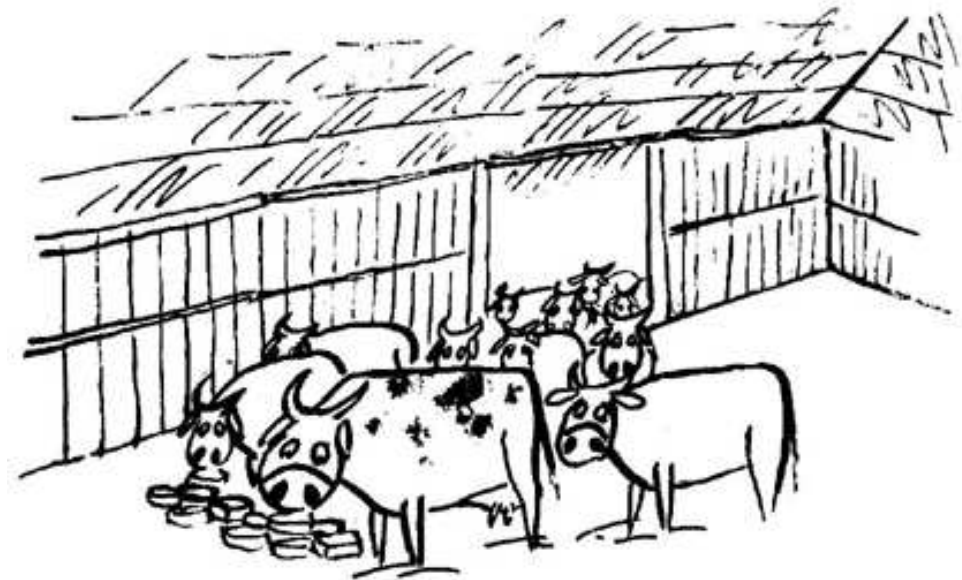
今此の母の教訓を思い出しながら思う事は、今年も西瓜の当たり年かどこで買っても色も良く味も良いと思うのは私だけか知らん。

（一九九四年）

（附） 私の作った西瓜糖は西瓜の汁だけで砂糖を入れる事に気が付かなかったので、純粹の ジェレーヤ（ジャム）が六〇リットル余り出来た。西瓜は大・小取り混ぜて何百個使ったか分からない。とにかくソフトボールのボール位の物までが全部完熟したのであった。

第二十五話

牛が石鹼を食う。



私達のフレーザ地区のシツチオは、ファゼンダ・フレーザが、耕地の一部を開拓資金を作る為に切り売りされたもので地味は良かったが、地形は上等という事ではなかった。シツチオの半分ぐらいは良いカフエーが育って、まあまあの生産が得られた。

セラアイス（穀物）も案外に出来て、十年間の生活は楽しかった。

そのフレーザ氏が英国人で大變鷹揚な立派な人であつて、ポルトゲース（ポルトガル語）の何も分からない日本人を大變親切に扱ってくれたので、忘れられない人である。夫人が亦生まれが良いのか貴婦人という恰好で夫のフレーザ氏がカマラーダ（雇い人）と一緒になつて働くのを好かない風であつた。仕事は支配人に任せて置けば良いという事であらう。

或る日曜にファゼンダ（農場）へ遊びに行くと、フレーザ氏が、

「此の頃みんなで楽しめる様にピッシーナ（プール）を作っているのだが、昨日使っていたマレッタやピカレッタ等を片付けずに置いたら誰かに盗まれた。お前の家の方にかついで行く者は見なかったか。」

と、尋ねられたが、その時も土曜も日曜もピッシーナ作りに働く良人に腹を立てて奥さんが道具を隠していたのであつた。私も、

「ドミンゴ（日曜）位は休んでファミリーア（家族）と一緒に楽しんだ方がいいよ。」

と話した事であつた。

或る日、「オオ沼田、今日は一緒にアルモツサ（昼食）をして行けよ。」と無理矢理誘ってくれたが、生活が天地の差なので恥ずかしくて一緒に食事の出来るようなものはなかったが終に誘われてサーラ（客間）に入った。メー

ザ（テーブル）には美しいメーザ掛けがかけて有った。

当時の日本人の一般家庭で普段にメーザ掛けを使用している家は無かったので生活の差を感じた。一人一人の前にお皿が四、五枚重ねて置いてあるのであった。どうして使うのか分らない。我が家ではエズマルタード（琺瑯）の皿一枚で済んでいるのに英国人の生活は四、五枚のセトの皿を重ねて置いて、上の皿で何かを食べ終わると給仕が皿を集めていく、次の皿で次の物を食べる。五枚置いてあるから五品に手をつけなければという事はなく満腹した処で食事は終わるのであった。此の時初めてトマテ・ジュースを飲んでみた。

此の時の食事で初めてヨーロッパ人の食事の仕方を知った。

その後、私の処でカマラーダ二家族にコロノとして大きな家族を入れたので井戸の水不足を来たし、フレーザ氏の住宅から二百米位下で、川の水を洗い物用にボンバ・カルネーロで揚げさせて頂いて大いに助かったものである。

或る日の事、そのフレーザのパスト（牧場）のアラメ（針金）が切られて牛の一群が隣りの私の家の囲り迄やって来て、パルミート建てのパイオーラ（物置）に入り込んでいたのである。パイオーラに味噌か、砂糖かを取りに行った妻がびっくりして戻って、何匹もの牛が入っていると行っているので行ってみると狭い物置の中は牛で一杯で

ある。牛を飼った事の無い者には一寸怖ろしい。やっと追
い出してから、ゆつくりと調べて見ると、なんとなんと、
豚の脂かすや内蔵で作った石鹼を相当に食べてあるので
ある。

この事を誰に話しても、「まさか」と言うのであるが事
実である。

それで、その翌日のドミンゴにファゼンダへ遊びに行
き、主人のフレーザ氏にその話をして、サボンを食べた牛
が腹を下す様な事はなかったかと聞くも、何も変化はな
かったから心配はいらないと言って、売店から一ダース
程の石鹼を紙に包んで「これで良いか。」と言うので、私
は弁償してもらうつもりで話をしたのではない、草しか
食べない牛が何故石鹼を食べたのか不思議で話をしただ
けで弁償は貰われんと言ったが、それ位僅かなものだけ
ら持つて行ってくれと言ってきたので貰つて来た。

それにしても不思議なのは何故あの時牛が石鹼を食べ
たのか、牛にそんな習性があるとは思われないが、与えれ
ば食べるものなのか、その後再び実験をした事はないが、
あの時は相当の量をたべたのであった。

(編集部・注・植物油や動物脂でつくった石鹼は豚も牛も好んで食
べる)

第二十六話

他宗の神棚を拝ます

入植した翌年の事であつた。隣りの畠に一ケ年だけの小作に來た人がいた。前年に植えたカフエーの手入れをしながら、間作を穫らせて貰うのであつた。間作の歩合を払つたかどうかは私達は知らない。

此の家族は水の無いランショに入つたので私の処の井戸迄、水を貰いに来ていたから、すぐに親しくなつた。

或る日、その奥さんが、主人にひどく叱られたと言つて、その話をするのであつた。

「或る日私が一人でアルモツサの用意をしている時Y婦人が尋ねて來た。家の前を通りかかったので、一寸寄らせてもらつた。と、言つて入つて來て在り来りの話、いつ來たか、どこから來られたか、等と二言三言言葉を交わしている、Y婦人は大きな仏壇と神棚があるのに目を止めて、すみませんが一寸此の神棚を貸して下さい、すぐに大工に寸法を取らせてお返ししますと言うので、それではどうぞと言う事になつて貸してあげたのです」

一週間もすれば返して来るだろうと待っていると、一週間が二週間、一ヶ月過ぎても返して來ないのである。そこで、お隣では夫婦げんかが始まつた。

「お前のバカが、神様を貸したりするからいらぬ心配をする事になる。寸法を取りたければ、此処へ來て計れば良い

ものを」と主人がおおると、「そんな事を言つて、まさか、神棚を借りてウソをつくとは思わなんだ。」と妻が言う。そうこうしている中に大げんかとなり、「もう我慢がならん、さつさへ行つてもらつて来い」と言う事になつて、夫人が四キロ程あるY家を歩いて訪ねたのであつた。

その日は日曜でその宗教の例会日で二十人余りの人が、お詣りして居たと言う。正面には此方で貸した他宗の神棚が飾られて、皆んながそれにおまいりしているので致し方がないのでお詣りが済むのを待つて、今日は貰ひに来た事を告げると、「既に大工さんが作りにかかっているので、もう暫く貸してください。必ず近い中に此方から持つて行きます」と、言つてなかなか返してくれない。「それでは困ります、今日持つて帰らないと主人に叱られますから。」と言えは、「ご主人には私から良くお詫びを申し上げますから」と言う様な事で、中々返してくれない。手ぶらで帰れは又叱られる事は分かつているので、氣の重い気分で歸つて来た。案の定、主人の立腹は、雷が落ちた様なものであつたという。

それにしても、いい面の皮は信者だ、人をだまして神様を入れ替えて拝ませられて、ご利益が有ると思つて喜んでゐる、お目出度い話である。

四、五ヶ月して神棚は元に納まつて話は終わるのであるが、この夫婦に珍しい後日談が有る。

翌年他の植民地へ移転して行かれたが、その後十数年して、主人が亡くなられるのであるが、丁度その時私は見舞いに行っていたのであった。家族の人は毎日の事であるから、病人を私に任せて仕事に行っておられた。と、休んでいたお爺さんの容態が急に変わって来たので私は表に出て叫ぶと、五十メートル余りの近くで除草していたので、すぐに返答が有ったので私は急いで部屋に戻ると、早息は切れるばかりであった。

間もなくバタバタと家族が戻って来たのであるが、家族の人は死に目には間に合わなかったので部屋に入るなりわあっと泣き出す者あり、すすり泣きする者あり、今生の別れで悲しい場面になったのであるが、十数分余りして家族全員集まった後にお爺さんの死んでいる顔の肉が動いて、声は出さなかったが、『にこっ』とうれしそうに笑ったのである。

これは私も家族の全員も、みんなで見えた事実である。この笑顔を見て、『お爺いちゃんの良い処へ行かれて喜ばれたのだ』と話し合い一同哀しみの内にも落ち着きが出て来るのであった。

信仰の深い人ではあったが、死後十数分も経てから人為的に作れる笑顔ではないので、私も この時は、極楽は有るものだったのであった。

第二十七話

九十六キロを歩く



それは日本から来て三ヶ月位した頃であつた。隣りの大西氏と相談して、ポルコ（豚）を一頭宛買つて来て食べようと言う事になり、二十四キロ離れた所に養豚をしている某氏がいると聞いて、若い大西氏夫婦と私と三人で出かけた。私は生まれて始めて父に作ってもらつたワラジをはいて出かけたのであるが、軽くて歩き易いので始めてはいてワラジへの認識を新たにしたのであつた。

昭和も八年の暮れの事ではあったが、ワラジばきが恥ずかしいと思う様な相手の一人もいる様な植民地ではなかったから気楽な気持ちで歩いて私は楽であったが、剣道初段で三十才、農村育ちの元気一杯の大西氏が、足に豆が出来たとて「痛い痛い」と大変苦痛の様で、その為に休み行こうと言う事になったが、少々休んでも出来た豆がすぐ治るものでもなく気の毒であった。それに引替え大西夫人は、やせた細い病人の様な人であったが歩く事には中々疲れを見せない元気の人であった。

時間に迫られるわけではないので、休み休みではあったが、お昼頃には目的の養豚家へ無事到着。そこで豚を見せて頂き、先ず、御夫婦で来られている大西氏に好きなのを選んで頂く。

次に私は金の都合もあって少し小さめの一寸やせ型のを買ひ、お互い後足の一方に細いコールド（紐）をしぼって歩かせながら帰る事になった。マンゲロンのふちで、先ず弁当を食べてと、手を洗って弁当をひろげようとすると、目の前のマンゲロンの中に生えている木に赤い果物が沢山実っていて、落ちたのは豚が争って食べているのであった。

聞いてみるとゴヤーバ（バンジロウ）という果実で、「どうぞ、自由に食べて下さい。」といわれるので、木に登って、食べてみると案外おいしいものであった。いい加減食べてから良く見ると、どれにもこれにも虫が湧いているのであった。「あつ虫がいる」と叫ぶと、その家の人は

笑いながら、「この虫はなんでもありませんよ、皆んなそのまま食べていますが、腹をこわす様な事はありませんよ。」と言われたが、私たちは虫に気がついてからは、食べる気にはなれなかった。

弁当を食べて、さて、いよいよ二十四キロの帰路に着いたのであったが、あにはからんや、大西氏の買われた豚は横着で私の豚と並ばせて歩かせようとしても二十メートル程歩くと道べりの草の上にベタツと横になってしまうのであった。だまして起こして歩かせても、又二十メートル程歩くと、ベタツと横になるので、これではとても二頭を一緒に連れていくのは無理だから、足の早い私の豚を連れて帰ってもう一度戻ろうという事になって、一頭だけ追って来たら、早足の豚のおかげで案外早く帰宅出来、一寸一休みして、私と大西夫人と二人で次の一頭を連れに戻ったのであった。大西主人はダウンしてしまったのである。

さて翌日再び二十四キロ出かけて来たが、歩かない豚の原因は豚の肥えすぎで、一匹にしても歩けないのであった。結局替わりの豚もいなかったもので、豚は返して手ぶらで又二十四キロ、計九十六キロを歩いたのであった。

これが私の一生の中の記録となるのであった。此の経験があるので、その後ロンドリーナ、バストス間の二百余キロを歩いてみたいと思う事は度々であったが、実現しない内に老いてしまった。（バストスは妻の里である）

さて一寸話を先に戻すと、二十四キロ一往復でダウンした大西氏、歩く事には自信を失ったのであったが、其の直後二た月とたたぬ間に、家族の将来の為に新植民地視察の旅に数十キロは川に橋の無いジャングルの中の土人の小道を、更に数十キロの道路と計百キロ余、即ちパラナピアカーバ山脈をふもとから登ってイタペチニンガ駅まで歩こうというのである。勿論往復であるし、経費節約の為であつた。着伯五ヶ月、言葉の何一つ解せない者が「パラナに行きたい」と書いてもらった紙切れを頼りに出かける事になるのであつた。

将来の為とは言え、五十キロでダウンした氏が二百キロ徒歩を覚悟しての出発は如何ばかりであつたかと思うのであるが、私はこれも初期移民の苦勞の一端と考えた。

三人で出かけた一人は、五十才になつた私の父であつた。

帰りのエピソードは項を改めたい。

第二十八話

井戸堀り

私たち沼田家の第三人へと頂いた、パラナに来て二度目を買ったシッチオは、地底に石の盤があつて水に不由をしたロッテ（区割り）であつた。

先ず初めに掘った井戸が、十二米程で石に当たり水は三十センチ程の溜まりで少なかったが石の底なので余り濁らないので一家族は何とか凌げていたが、其の中に契約者を人れる事になり、隣りのファゼンダ（農場）にお願いしてコルゴ（小川）の水を水圧利用の自動ポンプで揚げる事になったのであつたが、自動ポンプにも色々とプロプレーマ（問題）の有るもので、やはり良い井戸を一つ欲しいものと思い、ポッセーロを頼んで掘らせてみたが、石が出るので思うようにゆかず、それから農閑期を利用して自分で掘ってみる事にして結局は十七アルケールのシッチオに二十一ヶ処の井戸を掘る事になったのであつた。

或る井戸はピッサーラ（砂質）になって、しばらくすると水が出て来て、此の井戸は当たつたと喜んで掘り進めると忽ち堅いラーヂ（岩盤）にカチーンと、ピカレッタ（つるはし）の先から火花の出る様な始末でどうしようもない事になる事もあれば、そのラーヂと思つた石に丸みがあつて玉石と解る事も有り、もし玉石であれば百キロ位

迄は石の周囲を掘って後、十文字にコールドをかけて地上へ引き上げた。それより大きい石は井戸の脇に穴を掘って落とし込めたりし堀り進めて行くのであったが、幾つ掘っても最後はL A G Eに行き当たるので二十掘って諦める事になった。そのお陰で兄弟は三人共井戸堀りは大変上手になった。

二十を掘って諦めたと言っても井戸掘りを断念したのでは無く、住宅に便利な場所の井戸のL A G Eを打ち抜こうと、ダイナマイトを使って挑戦したのであった。此の考えは、鉄道でセーラ・モレーナ駅を通った時、駅の井戸が直径一メートル程の小さい井戸であったが、みごとに岩盤を打ち抜いたもので感心させられたことのあったのが刺激であった。

一日平均にして一センチ掘り下げられればと思って頑張ってみたが、一メートル二十の丸い井戸の底で、どう工夫して見ても難しく、何十発かのダイナマイトを使って幾度か危険な思いをした結果これも投げ出す事になった。その時のダイナマイトやエスポレッタの残品の処置に心配したものであった。素人があの様な危険物を使う事は成功より危険な事の方が多いので要注意だ。

その後に、それ迄は契約者と近く暮らす事ばかり考えて、住宅から近い処に掘っていたものを、契約者は遠く離れても良からうと、ロッテの反対側に行って最後の井戸と思って二十一本目を掘ってみたが、この井戸も三米か四米で石に当たって諦める事となった。ところが、井戸の

中で静かにしていると何処か近くを小川が流れる様な音がするのであった。音はかすかに聞こえるのであるが、しめりがないので近い処の音ではない。他方の何かの音が反響するのであろうとあきらめて、丸太でタンパ（蓋）をして引き上げたのであったが、その後長雨の時に脇を流れていたらしいあの音の水が新しい水みちをあけて此の井戸に湧き出して来て、此の井戸を契約者が二家族で利用する事になったが、水量は充分に間に合ったのであった。

やっと二十一本目に掘り当てた体験は、私達兄弟に、良い井戸や立派な湧き水に対する価値観に大きな差を持つ様になっていく事と思う。

先年、全く見事な湧き水の有るロッテを売った知人がいたが、他人事ながら、涙の出る思いであった。

良い井戸、良い湧き水は神の恵みだ。大切にしたいものである。

（編集部注・開拓者の井戸掘りについては「コロニア小説撰集 3」に『井戸』高野耕声 の佳編がある）

第二十九話

ラポーザ（狐）の料理

ブラジルに来て間もない頃であつた。或る晩、鶏が異様な声を立ててさわぐ、何かに襲われたのである。父が先頑になつて、ランプを持って飛び出すと子犬位の動物がいた。案外に動作がにぶく、すぐ父にたたかれて死んだが、何とも臭い動物であつた。

日本でもイタチか何か追い詰められると臭い屁をたれる奴がいるというが、その類だろう、朝になつてから埋めれば良いと、表に捨てて置いてそのままその夜は寝る事にした。

翌朝トマ・カフエー（朝のコーヒー）をしていると、デルバ・マツト（山伐り）の請負師の古木氏が来て昨夕のけだものを見つけて、

「これはうまい物がある、ラポーザといつておいしいから明日は日曜だしアルモッサ（昼食）に是非私の家において、貴方達もこれを料理する事を覚えなならん。」

と、言つてあの臭いねずみのお化けみたいなラポーザというけものを持って行かれた。パラナのラポーザより倍以上も大きい。

そして翌日の日曜になると、父が、

「折角あんなに言つて居られたのだから、誰も行かんわけにはいかん。」

と言つて、父母と私と兄の四人でピングと何か母が日本の物を一寸持つて出かけた。その時、古木氏は出稼ぎに来ていたので、私の家から二、三キロの地点で道べりに三×五メートル位の小屋を立てて、半分はサーラ兼コジニヤ、半分はクワルト（部屋、寝室）に使い、洗い物は裏の露天であつた。又すぐ近くをきれいな小川が流れていて便利な所であつた。夫人は背の高い、やせ型の相当色黒の外人であつた。一人七、八才の男の子が居たが、親に似合わぬ色白のかわいい子供であつた。

狭いサーラに入つて雑談をしていると、モレーナ（混血）の夫人が顔を出して色々ともてなししてくれるのであつたが、大変気持ちの良い応対で助かつた。

古木氏の生活はかなりに貧しい様であつたが、夫人は少しも氣にしていけない風であつた。間もなくいかもの、あの臭いラポーズの料理が出された。私は招かれていくとは言いながら変わった物は嫌いな質で、とてもラポーズは食べられないだろうと思つて来たのであるが、案外に良い匂いなのであつた。

古木氏が、

「さあさあ食べて見なさい、案外にうまいもんだよ。」

とすすめられるので、恐るおそる一寸取つて食べて見ると、そんな嫌な味のものではなく、食べられるのであつた。何でも、首と股の処ににおいをだすものがあるので、それをきれいに注意して除くのがコツだとの事であつた。歩くより仕方ないあの時代ビーラ（村落）より三十キロ

もの山奥、一キロのカルネセツカ（干し肉）を買うにも大変な時代であったから、山の獣は何でも食べられる様になつていたのかも知れないが、あのラポーゾを食べたのには驚いた。

今では六十年も昔の事であるが、何とも忘れられない。因みにサンパウロ州の海岸山脈の裾の地帯のラポーザは、パラナ州の物と同種類ではあるが大きさでは倍も三倍もの大型であった。

又、パラナにも鶏の卵を取りに来る大トカゲが居るが、むこうの大トカゲは、やはり此方のものより倍以上も大型であった。トカゲはうまいと言う話はパラナに来てから聞いたので、むこうでは食べた事はなかった。此方ではうまいとは聞いても便利が良くて豊富に食べる物があるので山の物はいたずら位でうまいからと食べたことはなかった。

大体私は、イカモノは好きでないのである。

第三十話

泥棒に負けた裁判



それは一九三七、八年頃の事であつたと思うが、町に隣接している某日系植民地で畠に置いてあつたアロース（粃）が何俵か盗まれた。勿論日本人の話である。一応此の人をT氏としておこう。

カフエーは植えたばかりで小さいので、その間作に植えたアロースの収穫中の出来事である。

終日たたいて遅くなつたので、エンサツカ（袋詰）して、ワラをかぶせて畠に置いて有つたものを、昼間仕事を

している様子を見た者が、夜来て盗んだもので、T氏の家族が翌日小屋へ運ぶべく畠に行つて見て、何俵も盗まれている事が分かつたのであつた。

私の近所でも似た様な事があつた。イタリア系の人でエンリツケと言う人であつた。此の人の場合は地形が二段になつていて、住宅は途中の石の沢山有つて車の通る道のつけられない坂の下の畠に家を建てて住んでいた。それで上の畠に小屋を建てて、収穫物は一旦その小屋に入れて置いて、後日ボツボツと下の物置にかつぐ事にしていたのであつた。処が或る時、やはりアロースであつたが、二俵程盗まれたのであつた。当時は収穫する量が少ないので二俵でもすぐに気が付いたという事であつた。

ところが、その日は雨の後であつたので、古い足跡は消えていて泥棒の足跡だけが付いていたという。それで足跡を伝つて行くと、長年つき合っている二軒目のビットリオ氏の玄関に入っていたと言う事であつた。仕方がないので「ボン・ジーヤ。」と、挨拶すれば応答があつて夫人が出て来て、中に招かれたがアロースの事は言えずにカフェーを一杯よばれて帰つて来たが、その夜の間に盗まれたアロースは戻つていたと言う事であつた。気の弱いビットリオ氏は相手が気が付いた事が判つたので、夜の間に返して来たのであつた。人の見ていない処でうまく盗んできて、足あとを付けて来たのでは仕方がない。

ここで前のT氏の話に戻るが、T氏の場合は、セツカ

（乾燥）続きの時であり、エストラダ（道）に出ているので足あとは分からなかったが、近所の人も来て、良く調べていると、カリヤドールの間では解らなかったが、エストラダに出てからは、所どころにパラパラと、アロースがまかれていたのに気の付く者がいて、それをたどると、二キロ程離れた外人の一軒家に届いたのであった。

そこで表から声をかけると、家族の者が戸をあけて出て来て応対した。その時、あけてある戸の向こうに見覚えの有るサッコに詰めたアロースが積んであるのであった。主人は居ないというので、それではと一旦引き揚げ、少し離れた所で番をしながら待つ事にし、二人程で警察を呼びに行き連れて来ると、同じ頃盗んだ当人も帰って来た。

当時既に日本人の信用は良かったので、相手は近所から買って来たとうソを言うけれど、此方ではサッコにマルカをつけてあるので間違いないと証言すると、警察は持って帰って宜しいと言うので、それ迄にはカロースも用意して来ていたので持ち帰ったのであったが、事件はそれで終わらなかった。

間も無く泥棒から裁判所に訴えられて呼出し状が届けられたのである。

裁判など経験の無いT氏は、仕方なく町の世話役の氏原彦馬氏に相談に行くと、「心配するな。」と、言う事で心強くして裁判の日を迎えた。

その当日少し早目に裁判所に近いボールに一同集まって、時間を待つ事にする。早く行っても裁判所では退屈と、時間つぶしにボールで腰かけてカフエー等飲んでいった。「ブラジルとはおかしな国だ、泥棒に訴えられて裁判所から呼び出しを喰うんだから。」等と話し合っている内に先日の警察官も来て 「何も心配するな。」と、力を付けてくれる。

その内にボツボツ時間だと言う事で裁判所に出頭すると、「こわ如何に。」裁判は泥棒が無罪で終わったと、しやあしやあとして相手方が出て来たのである。

此方は唯啞然とするばかりである。理由は此方の誰かの持っていた時計が何分か遅れていた結果の事である。裁判とは、裁判所の方で遅れる事が有っても、此方は時間までに出頭して置かないと、相手不在の裁判では完敗するものである、と言う事をいたく教えられたのであった。一旦取り返して来た自分の物を再び持って行つて返して来なければならぬのであるから情けない話である。

T氏の体験で一つ教えられた事であった。

あとがき

昨年（一九九五）のパラナ新聞の新年号に、移民当時の話を書いてほしいと言われて、やつとの思いで一編を書いた。ところが、次々と思い出す事があつて忽の内に三十編が溜まったので、マンガで有名な牛窪氏に話すと、それでは一冊の本にして置きなさい、私がマンガで挿絵をかいてあげるからとすすめられました。

私には生まれて始めての事であり、印刷物となると、人目に付いて恥ずかしい批判をされたりして、蕞蛇な事になりはしないか等と気づかっている間に一年が立ちました。その間に、あきれる計りの筆不精の私に、三十編を一区切りに、七部、二百十編が書き上がりまして、思いがけない事もあるものかなと思っている次第であります。

とても六冊、七冊の印刷など及びもつかないので、その中の何編かを選んで、もう一冊位出版することになるかも知れません。

内容はすべて実話です。昔を思い出して懐かしんで頂ければ幸いです。

なお、表紙は高橋果亭の俳句

コント札一尺祝い、花コーヒー

を漫画にしたもの。

高橋氏は、ホトトギス派の俳人、故人、アサイの人。草葉の陰で、世の移り変わりの激しさ に驚いていることでしょう。

カフェーと移民

発行 1996年4月
著者 沼田 信一
SHINICHI NUMATA
Rua R. Tavares, 828
CEP 86010-490 - Tel: (043) 322-1740
Londrina - Est. Parana - Brasil
印刷 Editora Grafica Topan-Press Ltda.
Rua Muniz de Souza, 655 - S. Paulo



著者 沼田 信一 略歴

出生 大正^天八年（1918）四月十五日
北海道札幌市北二条東一丁目に生る
学歴 札幌市第一高等小学校卒
渡伯 昭和八年（1933）七月サントス上陸、アリゾナ丸
直接海外興業株式会社開発のセッテ・バーラス植民地マンパウ
ロ区へ入植、翌年五月パラナ州ロンドリーナ市郊外中央区へ移
転、1942年フレーザ区へ移転、1950年ローランジャ市郊外へ移
転、1953年ロンドリーナ市内に移り今日に至る。
職業 渡伯後一貫して農業